

多様な学びの場における自己評価・相互評価の実践記録と内容分析

～兵庫県のオルタナティブ・スクールで行われた取り組みから～

【研究代表者】

武井 哲郎（立命館大学）

【共同研究団体・共同研究者】

ふぉーらいふ

神戸フリースクール

デモクラティックスクールまっくろくろすけ

橋本あかね（大阪大学）

2022年5月発行

はじめに

本報告書は、兵庫県で一条校の枠外にある学びの場(オルタナティブ・スクール)が行った自己評価・相互評価の取り組みを記録・分析したものである。

後述するように、今次の取り組みに参加したのは、「ふおーらいふ」、「神戸フリースクール」、「まっくろくろすけ」という三つの団体である。このうち「ふおーらいふ」と「神戸フリースクール」は、一般に「不登校」と呼ばれる子が安心して過ごせる居場所を準備してきた団体である。他方で「まっくろくろすけ」は、運営に関する事項を子ども(メンバー)と大人(スタッフ)が対等に話し合っ決めて決めることを原則とするなど、いわゆる「デモクラティック・スクール」にあたる団体だ。いずれも兵庫県内で長く活動を続けてきた団体であるが、その活動理念には違いもある。

今回はあえて各団体の活動理念の違いを前提としながら自己評価・相互評価を行った。なぜあえて自己評価・相互評価に取り組んだのか、活動理念に違いのある団体が互いにその運営を評価しあうことの意義・課題はどこにあるのか、詳しくは本文をお読みいただきたい。ただ、一条校の枠外にある学びの場が自己評価・相互評価に取り組む事例というのは非常に珍しいもので、今後の先例となりうるものであることを、ここでは強調しておきたい。

今次の取り組みは「まっくろくろすけ」の代表理事である黒田氏による発案でスタートし、当初は「ふおーらいふ」と「神戸フリースクール」を加えた三つの団体のスタッフで進められた。研究者(武井・橋本)が参画したのは途中からで、自己評価・相互評価が適切に実施されているかを第三者的な視点で確認するとともに、その意義・課題、オルタナティブ・スクールのネットワークが果たす役割等について考察を行うことが主たる目的となっている。

なお、この研究は科学研究費補助金・基盤研究(C)「オルタナティブ教育の中間支援組織に関する横断的・縦断的研究」(研究代表者:佐川佳之)の一環として行われたものである。本文をお読みいただくとわかるように、研究者自身も自己評価・相互評価の実践に関与しながら考察を進めており、アクション・リサーチの一種に位置づくものと言えよう。貴重な機会をくださった三団体の実践家みなさまに、記して感謝申し上げます。

武井哲郎(立命館大学)

橋本あかね(大阪大学)

目次

第1章	3施設相互評価実施のきっかけ・経緯と目的	1
第2章	評価の手順	4
第3章	自己評価の結果	7
第4章	相互評価の結果	32
第5章	自己評価・相互評価をふりかえって	48

第1章 3 施設相互評価実施のきっかけ・経緯と目的

2018 年秋に【2017 年度文部科学省「いじめ対策・不登校支援等推進事業」「学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究」—民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究— フリースクール等の支援の在り方に関する調査研究】(研究班代表:加瀬進・東京学芸大学)の研究報告会が東京で行われ、デモクラティックスクール・ネットから「デモクラティックスクール まっくろくろすけ」(以下まっくろくろすけ)の代表・黒田が参加した。

報告会では以下のことが話された。

2016 年 12 月に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会確保等に関する法律(以下確保法)」が施行された。「学校以外の場で育つ児童生徒及びその保護者に対する必要な情報の提供、助言その他の支援を行うために必要な措置を講ずるものとする」とある。そこでこの推進事業が始まった。報告書には「FS 等がその特色・自主性を損なわず、かつ国民の賛同を得て質・量ともに拡充するためには一定の評価システムの構築することが課題である。FS 等は子どものニーズに応じた多様性・自主性を特徴とするため、評価システムの構築にあたっては既成の評価尺度による外部評価ではなく、信頼性の高い、FS 等による相互評価の方法を開発する必要がある」とあり、相互評価のやり方・サンプルシートなどが紹介された。「しかし残念ながらこれを全国的に実践し、改良していくための調査費および人員がない。実践は各地で自主的にして、報告を学芸大などに上げてもらい、その結果を積み重ねることで、将来的には文科省が予算をとり全国規模で行えるようにしたい、そしてそれが行政・教育委員会等との連携、国からの経済的支援のための基準のための評価となっていけばいい」ということだった。

当時、兵庫県では各民間施設に通う児童・生徒及び保護者が希望しても、出席扱いは認められないこともあった。まっくろくろすけでも、住んでいる市町村の違いで可否が分かれていた。不許可の子どもは実習用通学定期券を発行してもらえず、通勤定期を買わざるをえない状況だった。それは、出席扱いが認められ学割実習定期を買っている子どもの 2 倍近い値段である。確保法が施行されても、このような差が解消しないのはどうしたらいいのかと頭を抱えていた。

この相互評価を行うことは、単に各施設が自己満足しているのではなく、外部からも教育的に意味のあることが行われていると評価されることである。これが出席扱い問題の解決のきっかけにならないかと黒田は考えた。不許可の教育委員会に対して、オルタナティブ教育が子どもの成長のためになっていることを説明するためのツールになるのではないかと、ぜひこの相互評価を兵庫県でやってみたいと思ったのが始まりである。

その後、19 年 10 月に文部科学省より古い通達の見直しがあったこと、20 年 4 月には兵庫県教育委員会が「不登校児童生徒のための民間施設に関するガイドライン」の小冊子を作成、配布したことにより、まっくろくろすけでも出席扱いを希望する子どもたちの全員が出席認定されるように

なった。

出席扱いが認められるようになったとしても、相互評価を行うことは各団体にとって有意義なことだと考えた。自団体のことを改めて考え文字化すること、また他団体を知ることにより多くを学べる。ちょうど21年度は新しいスタッフが入り、研修を行っていた。そこで、研修の一環として新しいスタッフ(児島)にこの相互評価を提案したところ関心をもってやってみたいとの返事だった。

相互評価を通じて若いスタッフたちが繋がるのは、子どもやその保護者に情報を届けるときにも役に立つ。90年代からスタッフをしている者たちはこれまで何らかのイベント・会議で一緒になったことがある。また、ともに企画することを通じて顔が繋がっていたり、相手のスクールのこともおおまかに理解したりしている。そこで自団体に相談に来た親子にも他のところがより合っていると思えば、紹介をしていた。一方で、新しいスタッフは前年からのコロナ禍もあり、他の団体と繋がっていない。80年代半ばから始まったオルタナティブ教育の運動も創始者世代は50代~70代となり、世代の引継ぎが必要な時期となってきた。そういった意味でも、相互評価を通じて若いスタッフが育っていくのは必要なことだと考え、神戸フリースクールとフリースクール For Life に2021年4月声をかけた。

両団体に声をかけた理由は次の通りである。一つ目はフリースクール For Life とは同じ97年に創立。それ以降親しくしてきており、この相互評価をやってみることに関心のある若いスタッフがいると聞いていた。また、神戸フリースクールは兵庫県に現存しているフリースクールで一番古いところであり、創立者から次のスタッフに主たる担当が代わっていた。そこで、両校とも互いの次世代のスタッフの研修としてよいのではないかと考えたからである。まっくろくろすけは民主ラティックスクールという理念に基づいており、同じ民主ラティックスクール同士は訪問やオンラインで交流会がある。だからこそ、民主ラティックスクールではないオルタナティブスクールと相互評価することで、新しい気づきがあるのではないかと考え、あえて民主ラティックスクールではないところに声をかけることにした。

二つ目の目的は行政・県及び各市町村の教育委員会等に各民間施設のことをより理解してもらうためである。もともとの相互評価の趣旨の通りである。3施設の実験的な取組が県下で定期的に行われるものに繋がっていけばと願って、試験的に自分たちでやってみることにした。

神戸フリースクール、フリースクール For Life と3校で自己評価、相互評価を試験的に実施することが決まり、実現に向けてミーティングを重ねてきた。その中で行政・市町村・教育委員会等に理解しやすい形に「成果」や「実績」としてスクールの活動を表記することはそれぞれのスクールの理念と合わないことが懸念された。しかし、今回の3校で行う自己評価・相互評価は完全に納得した形でなくとも、自己評価・相互評価の一連の流れを最後まで実践してみることで問題点や典型例を探し、この自己評価・相互評価の活動が少しずつでも広まり、より改良していくための試作となるように実施することとした。

実施のための話し合いの中で新しいスタッフ同士の交流の機会だけでなく、メンバー（子ども）同士の交流の機会になればより良い研修になるとの意見が出て、メンバーも参加することに決定した。普段よりスクール内でもメンバーたちから自団体以外のオルタナティブ教育校への興味の声は上がってはいたが、なかなか交流会の実現までは至っていなかったこともあり、この自己評価・相互評価が良い機会になると思われた。これは元々の調査研究の提案にはなかった独自の取り組みとなった。そのため、3校の打ち合わせ会議で子どもたち訪問シートを作成した。

今回の自己評価・相互評価にメンバーを交えて行うことでメンバー同士の交流の機会だけでなく、彼ら自身が他のスクールと自団体の違いを意識することで自団体の理念・活動を再認識することに繋がると思われた。また、大人だけでなくメンバーも相互評価に参加することで相互評価の視野が広がり、より多様な価値観で相互評価を行うこととなる。文章として書かれている理念を評価するだけでなく、その場の空気感に対して子どもならではの視点を取り入れた評価ができるのではないかと、子どもの主体性を掲げている3校らしいものができることを期待した。

◆自己評価・相互評価の目的として

同じ教育理念を持った団体ではない者たちが評価を行うことの懸念として、自団体と比べて批評を行ってしまうと、どのスクールが優れているかという尺度の評価になってしまい、オルタナティブ教育の独自性を傷つけてしまう恐れがある。そのために今回は自己評価シートに書かれている「自団体の理念・取り組み」に照らして考えたときにその団体は自団体の理念に沿っているかどうかを、信頼のおける他団体が評価することによって、理念と実情が離れていないか、他者の意見の入らない自己満足に陥っていないか検証することを目的の一つとする。

また、他団体と相互評価を行う中で、上記にあるように、自団体の理念の再認識や新しいスタッフの育成や他の団体とのつながりを強めることも目的であり、自己評価・相互評価が広まることでさらに多くの団体と交流する機会を作り、他団体と比べる事での自団体の再確認、他の団体が行う自団体の理念に照らした評価だけでなく、他団体と関わることで各団体の特徴・強み・独自性を再発見し、各団体間で違いを認識したうえで連帯を強めていくことを目的とする。

自己評価・相互評価がよりオルタナティブ教育の中で広まっていくことにより自己評価シートという同じ形式で色々なスクールを比較することができ、オルタナティブ教育を求める子ども、保護者の目的・条件に合うスクールを探す手助けになることも期待できるだろう。

報告書に「FS等がその特色・自主性を損なわず、かつ国民の賛同を得て質・量ともに拡充するためには…」と書いてあるように自己評価・相互評価を通して国民、行政・県及び各市町村の教育委員会など、広範囲にオルタナティブ教育を理解してもらい賛同を得ることで、将来的に行政・県及び各市町村の教育委員会等とも同じ子どもたちの成長を見守る組織として協力できる関係を作るひとつの活動になることも目的としている。

第2章 評価の手順

今次の取り組みは、①自己評価、②相互評価、③第三者評価、という三つから成り立っている(図2-1)。具体的な手順は次の通りである(図2-2)。

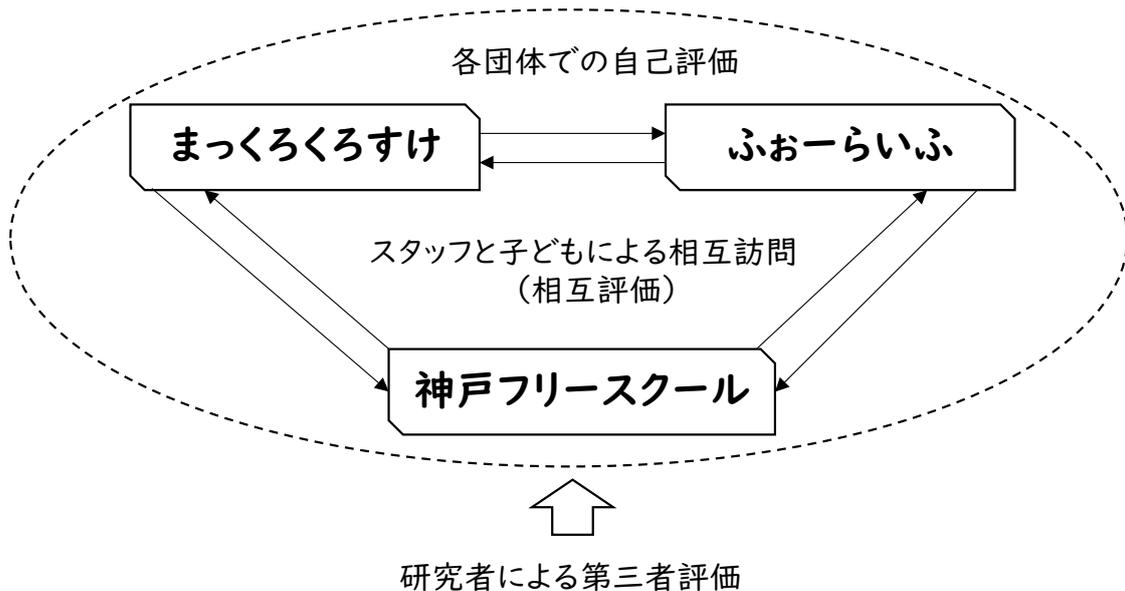


図2-1 学校外の多様な学びの場における評価の概要

第1章にも記されているように、自己評価・相互評価の実施を提案したのは「まっくろくろすけ」の黒田である。2021年3月に、黒田が「神戸フリースクール」と「ふおーらいふ」に呼びかけを行うことで、この取り組みがスタートした。

4月29日の第1回ミーティングでは、自己評価・相互評価の目的や進め方について三団体で認識の共有を図った。併せて、一条校の枠外にある学びの場をあえて「評価」することがどのような影響をもたらすかについて、ネガティブな面を含めて協議した。「評価」に対する懸念事項については、その後もメールでの話し合いが行われた。

5月27日の第2回ミーティングでは、「フリースクール等の支援の在り方に関する調査研究—自己評価と相互評価／第三者評価—」(2019年度文部科学省委託研究)で作成された「自己評価シート」の内容を確認した。何をもち「成果」を測るべきか、そもそも「成果」という言葉を使うべきかといった点について協議し、必要があれば「自己評価シート」の項目を変更することを決定した。

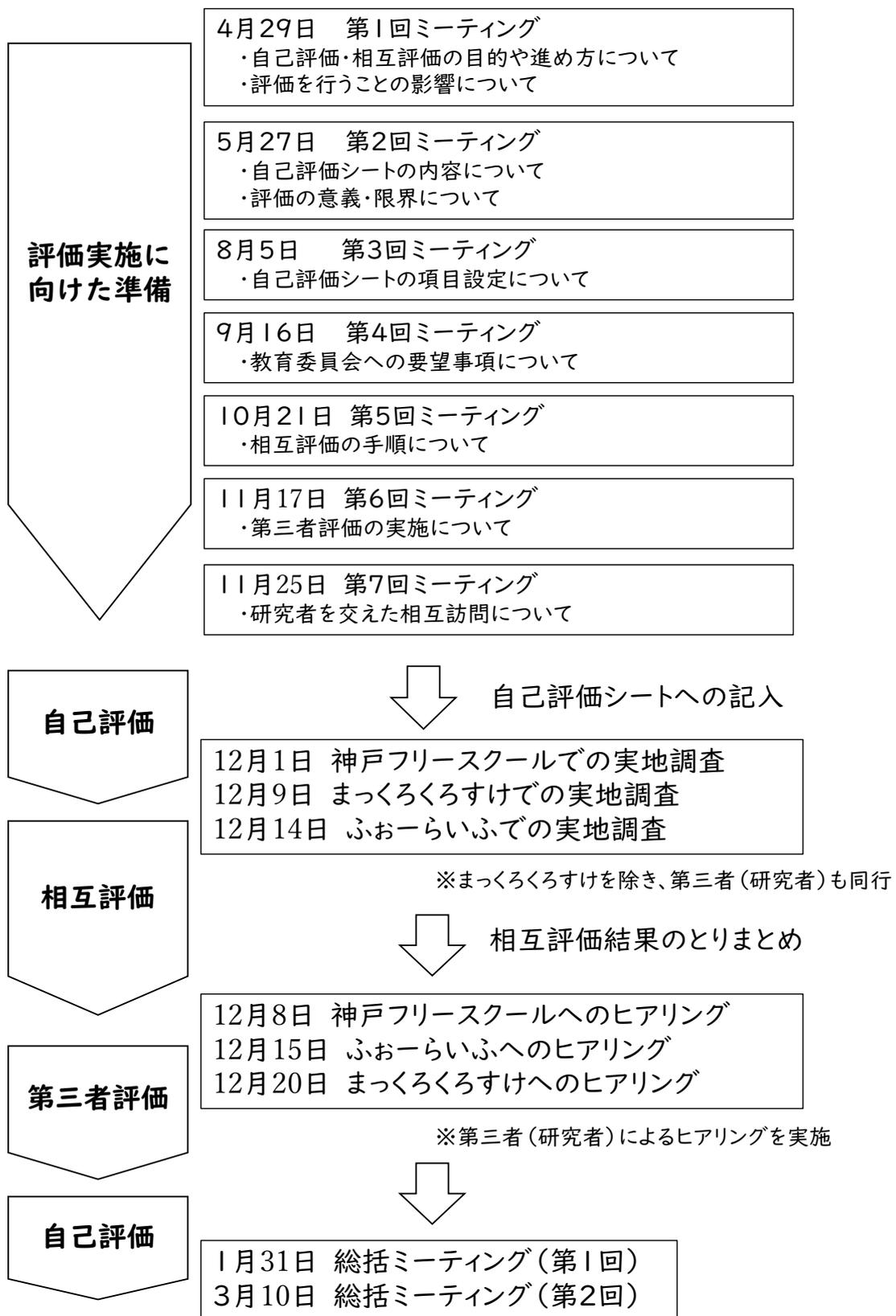


図2-2 評価の手順

8月5日の第3回ミーティングでは、「まっくろくろすけ」が試行的に記入した自己評価シートをもとに、評価項目として何を設定すべきかについて協議を行った。「成果」という言葉については、外部への発信という点を考慮し、あえてそのまま用いることを決定した。

9月16日の第4回ミーティングでは、自己評価・相互評価の取り組みが活動の透明性の確保や質の担保・向上につながるものであるとして、兵庫県教育委員会がこの取り組みを支援するよう求めることを決定した。

10月21日の第5回ミーティングでは、相互評価の進め方について協議を行った。①12月に三団体が相互に訪問を行うこと、②各団体が作成した自己評価シートに沿う形で意見交換を行うことを決定した。

11月17日の第6回ミーティングでは、自己評価シートの作成について引き続き検討を行うとともに、相互訪問の人数・時間等について話し合いを行った。また、第三者の立場から、武井・橋本がこの取り組みに参加することについて承認した。

11月25日の第7回ミーティングには研究者も参加し、相互訪問および相互評価の具体的な実施手順について確認を行った。

12月には、三団体による相互訪問を行った。訪問時には、各団体から子どもが3名、スタッフが1名参加するとともに、研究者（橋本）も同行した。当日は、①訪問を受ける側が自団体の取り組みで着目してもらいたいポイントを中心にあらかじめ「評価シート」を作成、②団体の取り組みに参加してもらった後、訪問者がそのシートに評価を記入、③記入したシートの内容をもとに全体でミーティング、という手順で進めた。②にあたっては、子どもたちが記入しやすくなるよう、施設内部を見学したり、一緒に過ごしてもらう時間を設けたりと、可能な限りの工夫を行った。評価結果については、第3章に記す。

併せて、自己評価・相互評価が適切に実施されているか、研究者（武井・橋本）が第三者的な視点で確認を行った。相互訪問の後には、評価活動を経て各団体でどのような成果・課題を認識したか、ヒアリングを実施した。

自己評価・相互評価が一通り終了したところで、今後の取り組みがどのような意味を持つものだったのか、全体で振り返りを行った。学校外の多様な学びの場を評価する際に留意すべき点を確認する機会であったのはもちろん、他団体からの評価を通じて自団体の取り組みを省察する（再度の自己評価を行う）場となった。

第3章 自己評価の結果

本章では、ふぉーらいふ、まっくろくろすけ、神戸フリースクールがそれぞれ記入した自己評価シートを示す。

自己評価シートは、2019年度文部科学省委託研究『フリースクール等の支援の在り方に関する調査研究—自己評価と相互評価／第三者評価—』¹（発行者：加瀬進）で作成されたものを使用している。前章でも述べたように、相互訪問・相互評価を実施する前に、自己評価シートへの記入を行った。

¹ https://www.mext.go.jp/content/20200428-mxt_jidou02-000006888_3.pdf より閲覧可能である。

フリースクール等（学校以外の学びの場）の自己評価シート

黄色い欄をご記入ください。チェックボックスは該当するものに、チェックをしてください。
緑色欄は追加がある場合にご記入ください。

1. 団体の概要（フェイスシート）

ふりがな	ふりーすくーるふぉーらいふ		
名称	フリースクールForLife		
所在地	〒 655-0022 神戸市垂水区瑞穂通7-2		
電話番号	078-706-6186	FAX番号	078-706-6186
メールアドレス	forlife@hi-net.zaq.ne.jp		
ホームページアドレス	http://fsforlife.sakura.ne.jp/	開設年	西暦 1997 年
ふりがな	とくていひえいりかつおうほうじんふぉーらいふ		
設置者・団体	特定非営利活動法人ふぉーらいふ		
設置者・団体の性格	<input type="checkbox"/> 法人格を有しない任意団体 <input checked="" type="checkbox"/> NPO法人 <input type="checkbox"/> 一般・公益社団法人 <input type="checkbox"/> 一般・公益財団法人 <input type="checkbox"/> 学校法人 <input type="checkbox"/> 準学校法人 <input type="checkbox"/> その他（ <input type="checkbox"/> 社会福祉法人 <input type="checkbox"/> 宗教法人 <input type="checkbox"/> 医療法人 <input type="checkbox"/> 営利法人（株式会社・有限会社等） <input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 行政・公的機関（教育支援センター等）)		

2. 活動等の状況

① 受入の対象

受入対象年齢（学齢）	下限 <input type="text" value="10"/> 歳	上限 <input type="text" value="17"/> 歳	※上限、下限が決まってい ない場合は、「なし」と記入
在籍できる上限年齢	上限 <input type="text" value="20"/> 歳		
備考（	23歳になった年度末まで在籍が可能		）

② 受入の条件（ある場合に記載）

<ul style="list-style-type: none"> ・子ども本人が入学の意思を持っていること。 ・医療の領域にある場合は、主治医との連携が取れること。
--

③ 運営形態（複数回答可）

<input checked="" type="checkbox"/> 通所型 <input type="checkbox"/> 宿泊型 <input type="checkbox"/> 訪問型 <input type="checkbox"/> その他（)

④ 子どもの学びや活動上の開所日数や時間

開所日数	週 <input type="text" value="5"/> 日 年 <input type="text" value="194"/> 日													
曜日	<input checked="" type="checkbox"/> 月 <input checked="" type="checkbox"/> 火 <input checked="" type="checkbox"/> 水 <input checked="" type="checkbox"/> 木 <input checked="" type="checkbox"/> 金 <input type="checkbox"/> 土 <input type="checkbox"/> 日													
備考（	小～中学生は月曜・火曜・水曜・金曜日、高校生以上は火曜・木曜・金曜日。		）											
長期の休み	<input checked="" type="checkbox"/> 夏休み <input checked="" type="checkbox"/> 年末年始 <input checked="" type="checkbox"/> 春休み <input type="checkbox"/> その他（)													
⑤ 1日の開所時間	<table border="1" style="width:100%; text-align:center;"> <tr> <td>開所</td> <td>10</td> <td>時</td> <td>0</td> <td>分</td> <td>～</td> <td>閉所</td> <td>16</td> <td>時</td> <td>0</td> <td>分</td> </tr> </table>			開所	10	時	0	分	～	閉所	16	時	0	分
開所	10	時	0	分	～	閉所	16	時	0	分				
備考（	月曜日は12時00分～16時00分、木曜日は12時00分～17時00分まで開所。		）											

⑥ 子どもの人数 (2021年12月1日現在)

子どもの数		人数	特徴 (あれば)
就学前		人	
小学生		3人	不登校の児童
中学生		9人	不登校の生徒
学 齢 期 超	15～17歳	1人	県立の通信制や高卒認定試験受験者
	18～19歳	2人	県立の通信制や高卒認定試験受験者
	20歳以上	人	
合計		15人	
2020年度の年間入会(入学)者数		2人	
2020年度の年間退会(卒業)者数		5人	

⑦ スタッフの概況

常 勤	有給	3人
	無給	人
非常勤	有給	3人
	無給	人
ボランティア	有償 (実費の支弁など)	3人
	無償	人

⑧ ホームページ等で公開している情報

<input checked="" type="checkbox"/> 理念や特長	<input checked="" type="checkbox"/> 学びや活動のようす
<input checked="" type="checkbox"/> 入会案内・入会条件	<input checked="" type="checkbox"/> 入会金・会費(授業料)・その他費用等
<input checked="" type="checkbox"/> 代表・責任者名、役員	<input checked="" type="checkbox"/> 団体・スクールの財務状況
<input checked="" type="checkbox"/> 在籍している子どもの概況(人数・年齢等)	<input checked="" type="checkbox"/> 問い合わせ先や方法
<input checked="" type="checkbox"/> スタッフの概況(人数・体制等)	

⑨ 活動内容(複数回答式)

<input checked="" type="checkbox"/> 個別の対応や学び	<input checked="" type="checkbox"/> 学びの成果、演奏や作品などの発表会
<input checked="" type="checkbox"/> 授業形式(講義形式)による学び	<input checked="" type="checkbox"/> 居場所提供
<input checked="" type="checkbox"/> 社会体験(見学、職場体験など)	<input checked="" type="checkbox"/> 相談・カウンセリング
<input checked="" type="checkbox"/> 自然体験(自然観察、農業体験など)	<input type="checkbox"/> SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)
<input checked="" type="checkbox"/> 調理体験(昼食づくりなど)	<input checked="" type="checkbox"/> 受験勉強
<input checked="" type="checkbox"/> 芸術活動(音楽、美術、工芸など)	<input type="checkbox"/> 就労訓練
<input checked="" type="checkbox"/> スポーツ活動	<input checked="" type="checkbox"/> 保護者会、親の会
<input checked="" type="checkbox"/> 宿泊体験	<input checked="" type="checkbox"/> その他特色ある活動
<input checked="" type="checkbox"/> 子どもたちによるミーティング	()

3. 私たちの団体・スクールの理念、学びや活動の特長

・当法人は、フリースクールForLifeの運営を中心に、不登校や発達障害などの子どもたちと、その親を支援する非営利の団体である。

・スクールの教育理念として、「自主・自律（立）・生活と命」を掲げている。それぞれの意味は、以下の通り。

【自主】…自分の好奇心を軸に、自ら進んで活動に参加する。

【自律（立）】…自分のペースで活動する。

【生活と命】…子どもたちにとって安心で安全な居場所を作る。さまざまなヒト・モノ・文化との出会いを大切にす。体験活動を重視し、生活の中からさまざまなことを知る。

・スクールの活動理念として、「達成感」「連帯感（協調性）」「自分との対峙」「自己肯定感」「他者へのいたわり」といったことが学べるよう、様々な体験活動（自然体験、学習体験、仕事体験等）を提供する。活動は、子どもたちの話し合いで決める。

4. おおむねこの3年間で、私たちが重点的に取り組んできた方針とその方針の背景にあった子どもの状況やニーズ、団体・スクールの状況等

①個性の尊重・個別性の重視

不登校経験、発達障がい等の特性、家庭環境など多様な状況や困難を経験した子どもも少なくない。一人ひとりの個性を尊重し、子どもを場に合わせるのではなく、できる限り、子どもを中心に個別性に応じて、場が子どもに合わせて変わるよう取り組んできた。

②子どもの「やりたい」ことを中心とした活動・体験的な学び

後述のCaféミーティングや日々の会話の中で発せられた子どもの「やりたい」ことを中心に活動を行っている。また、様々な自然体験や仕事体験を通じて、「達成感」「連帯感（協調性）」「自分との対峙」「自己肯定感」「他者へのいたわり」といったことを学べるよう、具体には、木工や林業、料理、キャンプ、地域での仕事体験などの機会を提供している。

③地域等の社会資源を活用した学び

限られた教育財源のなかで少しでも充実した学びを実現するために、地域の中での社会貢献（赤い羽根募金活動、区民体育祭、ボランティアまつり、商店街の催事への参加協力など）と自主的な社会貢献活動（プルタブde車いす寄贈プロジェクト）を行ってきた。さらに、いろいろな生き方をしている方、特技を持っている方を招いて交流したり、垂水区区民スポーツの日という地域行事へ参加するなど、地域と積極的に交流し、スクールを温かく見守ってくれる地域の中で、子どもたちがのびやかに学び、育つようなプログラムを実施している。

5. おおむねこの3年間で、学びや活動において、成果のあった特長的な取組事例（重点的な取組方針に沿った事例をを記述し、その取組について該当する観点①～⑤を選択。加えて、それ以外の特長的な事例があれば、あわせて1～3事例まで記述可。）

観点① 個性や特徴、個別性に応じた学びや活動
 観点② 基礎的な学力の習得
 観点③ 体験的な学びや活動
 観点④ 子どもの協同的な学び・活動
 観点⑤ その他

事例(1)	Caféミーティング	観点	①
(ア) 取組の概要			
<p>スクールでの学習内容や探究活動、体験学習プログラムは、子どもたちが話し合いをするcaféミーティング（学校でいうところのホームルームや委員会活動のような場）で提案され、彼らの意見で採択されたものが実行されている。このcaféミーティングは週に1回のペースで設けられている。参加は選択制で、自己表現が苦手な子どもは、口頭で他者にことづてをしたり、文字情報で伝達したりすることも可能で、参加を強制されることは原則としてない。この参加ルールも、caféミーティングの中で、子どもたちの意見で合意形成され実行に至っている。</p>			
(イ) 子どもの習得・経験・成長のようす			
<p>caféミーティングという意見交換の機会を通して、発言が苦手だった子どもが発表できるようになったり、対面が苦手な子どもがZOOMの画面越しにミーティングに参加したり、それまで盲目的に参加していた子どもが参加しないという意思表示ができるようになっていく。また、彼らを中心に、ミーティングの時間や内容が見直しされ、時間は30分、重要な課題やイベントなどは、時間か日程で目的別に話し合うということも決められている。</p>			
(ウ) スタッフの関わり方			
<p>子どもたちの参加形態に合わせ、丁寧に声をひろうとともに、caféミーティングに参加している子どもたちの場へ伝えている。また、スタッフ（大人）は、発言・発信力が強く、子どもたちに影響を与えてしまうために、可能な限り、中立的な立場を保つように努めている。また、重要な話し合いの場では、ファシリテーションと記録をとる係を引き受けるなどして、話し合いの場に出られない子どもに、話し合いの結果を伝えられるようにしている。</p>			
(エ) さらに充実・発展させるため改善点や方策など			
<p>子どもの声を丁寧に拾っていくためには、日頃からの関係性が大きく影響することから、個別の関わりと全体への関わりをバランスよく取る必要があり、スタッフそれぞれが気をつけている。また、話し合いの結果を見て理解できる、聞いてわかるようなユニバーサルなデザインや環境の整備が欠かせないと考え、必要な研修を実施したり、外部の講座を受講することを推奨している。また、人材確保によりより個別に丁寧な関わりができる場を醸成していくことが求められている。</p>			
(オ) 付記事項			

追加事例(2)	学習の時間の使い方	観点	②④
(ア) 取組の概要			
<p>火曜日・水曜日の午前中は「学習の時間」となっている。子どもたちがそれぞれ取り組みたい課題を持ってくるのだが、なかなか取り組むまでに時間がかかったり、ゲームに興じてしまったりで、静かに過ごせないことも多く、隣の部屋で、しっかり勉強したい人がいてもうるさくて手につかないことがミーティングに出され、他の人の学ぶ権利を保障するには、どうしたら静かな時間になるのか、話し合い、学習に時間の過ごし方をまず実験的にやってみることにした。</p>			

<p>(イ) 子どもの習得・経験・成長のようす</p> <p>一週間過ごしてみてもどのように改善されたか、また出来なかったかを話し合ってみると、自覚的に過ごせた子どもや意識していなかった子どももいて、依然とあまり変わらないことを確認。さらに一週間延ばして学習の時間の取り組みに挑戦した。前の週余比べ意識的に過ごせる子どもが増えたこと、部屋を変えて1回の広い部屋で机に向かう子どもも出てきた。学習のはかどりが実際感じられることで、少しずつ習慣になりつつある。</p>
<p>(ウ) スタッフの関わり方</p> <p>スタッフは常に部屋を移動したり、子どものわからないところに対応するなどの配慮をしたり、他の人が勉強することを妨げている子どもには、声をかけ、今何をするときかを諭したりした。子どもが自覚的に学習に取り組めるよう、個々の学習の記録を対話をしながら記入するようにしている。</p>
<p>(エ) さらに充実・発展させるため改善点や方策など</p> <p>調べ学習などから、子どもの興味関心のあることを、さらに広げて、プロジェクト学習の形に発展させることを心がけたい。</p>
<p>(オ) 付記事項</p>

追加事例 (3)	プルタブde車椅子寄贈プロジェクト	観点	④
(ア) 取組の概要			
<p>社会貢献活動の一つとして、2006年から始めている「プルタブde車椅子寄贈プロジェクト」に継続して取り組んでいる。2004年新潟中越地震が起こった際、当時中学生がボランティアに行きたいとミーティングに諮った。しかし、いきなり現地に中学生が入り込んで、大丈夫だろうか？と話合った結果、スクール内で募金をして、神戸新聞を通じて、現地に寄付を送った。その後、当該生徒は何か社会に役立つことをと考えて、今度は「プルタブを集めて車いすを贈る」という新聞の切り抜きを持ってきて、これなら皆で協力できる！とこのプロジェクトが始まった。今では、日本各地からプルタブが寄せられたり、小さな子どもが袋に入れて届けてくれたり、プルタブを通じて多くの人の輪ができています。今まで、3台の車いすを寄贈。子どもたちは、計量して袋に詰めたり、袋がいっぱいになると窓口にメールで連絡をして佐川急便に取りに来てもらう。寄贈先を皆で考えるのも楽しみのなっている。</p>			
(イ) 子どもの習得・経験・成長の様子			
<p>その時々の子どもの関心の度合いが異なるが、プルタブが届けることで、周囲とのつながりを感じられるようになってきた。車椅子の寄贈先を決める際は、皆真剣に考えている。その一方で、このプロジェクトが社会に役に立っているという実感は、特に近年コロナの影響で直接寄贈先に車椅子を手渡しできずにいる（車椅子は寄贈先に郵送した）ため、以前と比べ薄くなってしまったように思われる。</p>			
(ウ) スタッフの関わり方			
<p>実際の作業の部分では、子どもたちと共に集荷に向けての準備を行っている。</p> <p>①プルタブを受け取る ②送り主を記録する ③子どもと計量をして、袋に詰める ③要領を満たしたときに、事務局にメールをして集荷の依頼</p>			
(エ) 更に充実・発展させるための改善点や方策			
<p>子どもたちが持続的に関心を持つような工夫が必要。コツコツと積み重ねることで達成感を得るという実感が持てるように、その時々作業だけでなく、あと何キロ集まれば車いすが寄贈できる、といった目標を見える化しておく。さらに、環境問題を考えるきっかけにしたり、SDGsを目指す地球規模のテーマにも関心が向くような広げ方ができる。「生活」を理念に掲げる団体として、展望をもってとりくみたい。</p>			
(オ) 付記事項			

6. 子どもの進路について

退会(卒業)の子どもの進路選択の特徴、進路先の具体例、OB・OGの活躍や特記すべき事例など

途中の進路変更(スクールを辞める)のケースとして、学校復帰のほかに、場に合わないという結果に至ることがある。入学時に私どものスクールの特徴(子どもたち同士の話し合いが多いこと)などがうまく伝わっていないのではないかと考えられる。

年度末の進学先は多様で、次の年次に学校復帰するケース、高校・大学進学を機に居場所が不要となるケース、福祉の支援が必要となり、就労支援関係の制度をもとに設置されている専門機関に移るケース、就職などがある。

7. 子どもの学びや活動の向上、団体・組織の向上のために、私たちが取り組んでいること(研修・評価など)

- ・スタッフは毎日ケースをもとに現場での関わりについて振り返りを実施している。加えて月に2回、ボランティアスタッフとの意見交換の場を設けている。
- ・年3回、心理色や大学教員、非営利団体支援などの専門家で構成される理事会を開き、スクールの運営方針や職員体制、有事(コロナ禍や個別のケースなど)を報告、指導を受けている。
- ・法人を所管する神戸市に年に1回財政状況や事業報告を提出している。このほか、NPOの情報サイトにも決算や報告書類などを掲載するとともに、個人情報に配慮した上で、写真や映像を使ったWEB媒体(ブログやSNS)を複数活用して、幅広い層に向け、情報の公開に努めている。
- ・NPOやフリースクール、親の会等の中間支援組織の会員になったり講習会や交流会に参加し、外部情報を積極的に取り込むようにしている。
- ・子どもたちの在籍校を所管する教育委員会や当該学校の校長・担任のヒアリングを受け、行政・議員・学生・一般の視察見学も受け入れしている。

8. 私たちの団体・スクールの組織・運営について(・どのようなしくみがあるか ・反映した成果の実例・今の課題は何か などの観点で記載)

①子どもの意見を反映するしくみ、子どもが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

- ・スクールに関して 子ども同士、子どもとスタッフの間で、対話する機会を積極的に設けているほか、学期ごとにアンケートと自己語り(ナラティブという聞き取り)の方法を用いて、子どもたちの生の声をひろいあげ、以降の学習などのプログラムに反映している。
- ・法人の運営に関して 団体職員が、異なる分野の外部組織と繋がりを積極的につくり、相互に情報交換することで、社会情勢に対応した組織運営に生かすことができるよう努めているほか、教育や子育て支援における注意すべき点について、ノウハウを取り入れられるよう工夫している。また、教育に偏らない分野の人物を理事に招聘することで、多角的な視点で、学習プログラムの見直しや、組織運営のチェックを受けられるようにしている。

②スタッフの意見を反映するしくみ、スタッフが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

- ・第三者のアドバイザーを年1回以上招聘し、立場にかかわらず、自身の疑問や解決したい課題を相談できる機会となるよう、工夫している。(研修)

③保護者・その他の関係者の意見を反映するしくみ、彼らが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

年に2回、保護者との個別面談を実施し、子どもの状態を共有しながら、希望などをうかがえる機会としている。また、一般公開の行事(学校でいうところの文化祭のようなもの)を設けることで、保護者や外部の目線がスクールや現場に入るように工夫している。

9. 安全面で実施・配慮していることについて

- 緊急時対応マニュアル 安全管理マニュアル 保険対応

その他、実施していること(ある場合に記載)

- ・警報発令時や、子どもや大人の傷病にともなう臨時休校の基準を設けており、それにコロナ禍の対応のフローも追加されている。
- ・コロナ禍における感染防止対策(検温・消毒・換気など)子どもたちも共に励行している。

10. 子どもやスタッフの人権を守るために実施・配慮していることについて

- ハラスメント・虐待・いじめなどに関する宣言等
- ハラスメント・虐待・いじめなどに関するスタッフ研修
- ハラスメント・虐待・いじめなどに関する相談ができる体制や仕組み

その他、実施していること（ある場合に記載）

・日常的に子どもたちの声を聴き、話しやすい環境を作っている。

11. 学校・行政・地域・団体・NPO・企業等との連携について**①【学校・行政】どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載**

・小中学生の在籍校に「報告書」（通所日数と活動のようす）を送付している。
 ・入学時に、所管の教育委員会と在籍校の校長、教員の視察ヒアリングを受けている。
 ・2010年に神戸市垂水区社会福祉協議会から「協働コーディネート事業」を受託。（現在も継続）
 ・2013、15年に文科省から「いじめ対策等生徒指導推進事業」を受託。
 ・2019年に、尼崎市から「指導要録上出席扱いとすることができる不登校児童生徒を対象とした民間通所施設」認定を受ける。
 ・法人として、学校法人兵庫県立青雲高等学校 評議員、社会福祉法人神戸市垂水区社会福祉協議会 評議員、特定非営利活動法人フリースクール全国ネットワーク 理事、特定非営利活動法人登校拒否・不登校を考えるネットワーク 代表理事、兵庫フリースクール連絡協議会 運営委員、学校外で学び育つ子どもの権利保障を進める会・ひょうご 代表委員、ひょうご市民活動協議会 運営委員を委嘱され、法人内の担当職員が参画している。 ・新たな連携の形として、兵庫県教育委員会と民間団体の意見交換会、神戸市教育委員会との意見交換会 不登校支援推進協議会（県教委/やまびこの郷）に参加している。

②【地域・団体・NPO・企業等】どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載

・近隣自治会に加盟し、日常的にも子どもの見守りをしてくださっている。
 ・子どもの「職場体験」で、地域の飲食店、保育園、寄付や助成等の企業に協力いただき体験先として受け入れていただいている。
 ・企業や財団に寄付助成いただき、子どもの料理講座や体験活動、困窮家庭の子どもの会費減額受け入れなどを支援いただいている。

12. 団体・スクールの理念を実現し、特長を活かし、学び・活動をより発展させるために、課題となっていることと改善のための今後の方針について

・慢性的に、財政と人材が不足している。少なくとも公立学校の教員と同等の待遇を実現できるよう、事業収入または寄付、行政期間による補助実現の陳情など、一体的に模索していく必要がある。
 ・こどもの権利・人権について、体系的に学び深める場が不足しており、1スクールだけではない業界共通の研修プログラムの開発が必要と思われる。
 ・学習の在り方、内容の検討は必要に応じて考えはしているが、子どもの興味関心の入り口の「なぜ？」をどのように受け止め、広げ、あるいは深められるか？は課題だと思う。生活そのものが学びであることの「理念」をどのように根付かせていくかは、今後のスタッフ間の学習の機会を持つ必要を感じている。

フリースクール等（学校以外の学びの場）の自己評価シート

黄色い欄をご記入ください。チェックボックスは該当するものに、チェックをしてください。
緑色欄は追加がある場合にご記入ください。

1. 団体の概要（フェイスシート）

ふりがな	いっぱんしゃだんほうじん でもくらていっくすくーる まっくろくろすけ																
名称	一般社団法人 デモクラティックスクール まっくろくろすけ																
所在地	〒 679-2324 兵庫県神崎郡市川町坂戸592																
電話番号	0790-26-1129	FAX番号	0790-26-1129														
メールアドレス	makkuro02@yahoo.co.jp																
ホームページアドレス	https://www.makkuro20.jp	開設年	西暦 1985 年														
ふりがな	いっぱんしゃだんほうじん でもくらていっくすくーるまっくろくろすけ																
設置者・団体	一般社団法人 デモクラティックスクールまっくろくろすけ																
設置者・団体の性格	<table border="0"> <tr> <td><input type="checkbox"/> 法人格を有しない任意団体</td> <td><input type="checkbox"/> 社会福祉法人</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> NPO法人</td> <td><input type="checkbox"/> 宗教法人</td> </tr> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> 一般・公益社団法人</td> <td><input type="checkbox"/> 医療法人</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> 一般・公益 財団法人</td> <td><input type="checkbox"/> 営利法人（株式会社・有限会社等）</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> 学校法人</td> <td><input type="checkbox"/> 個人</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> 準学校法人</td> <td><input type="checkbox"/> 行政・公的機関（教育支援センター等）</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> その他（</td> <td></td> </tr> </table>			<input type="checkbox"/> 法人格を有しない任意団体	<input type="checkbox"/> 社会福祉法人	<input type="checkbox"/> NPO法人	<input type="checkbox"/> 宗教法人	<input checked="" type="checkbox"/> 一般・公益社団法人	<input type="checkbox"/> 医療法人	<input type="checkbox"/> 一般・公益 財団法人	<input type="checkbox"/> 営利法人（株式会社・有限会社等）	<input type="checkbox"/> 学校法人	<input type="checkbox"/> 個人	<input type="checkbox"/> 準学校法人	<input type="checkbox"/> 行政・公的機関（教育支援センター等）	<input type="checkbox"/> その他（	
<input type="checkbox"/> 法人格を有しない任意団体	<input type="checkbox"/> 社会福祉法人																
<input type="checkbox"/> NPO法人	<input type="checkbox"/> 宗教法人																
<input checked="" type="checkbox"/> 一般・公益社団法人	<input type="checkbox"/> 医療法人																
<input type="checkbox"/> 一般・公益 財団法人	<input type="checkbox"/> 営利法人（株式会社・有限会社等）																
<input type="checkbox"/> 学校法人	<input type="checkbox"/> 個人																
<input type="checkbox"/> 準学校法人	<input type="checkbox"/> 行政・公的機関（教育支援センター等）																
<input type="checkbox"/> その他（																	

2. 活動等の状況

① 受入の対象

受入対象年齢（学齢）	下限 <input type="text" value="4"/> 歳	上限 <input type="text" value="19"/> 歳	※上限、下限が決まっていない場合は、「なし」と記入
在籍できる上限年齢	上限 <input type="text" value="なし"/> 歳		
備考（			

② 受入の条件（ある場合に記載）

子ども本人が入会の意思を持っていること。
一人で体験を少なくとも二日は行い、
その様子を踏まえてミーティングでスクールへの入学を認められること。

③ 運営形態（複数回答可）

<input type="checkbox"/> 通所型	<input type="checkbox"/> 宿泊型	<input type="checkbox"/> 訪問型	その他（
------------------------------	------------------------------	------------------------------	------

④ 子どもの学びや活動上の開所日数や時間

開所日数			
週	<input type="text" value="4"/> 日	年	<input type="text" value="178"/> 日
曜日	<input type="checkbox"/> 月 <input type="checkbox"/> 火 <input type="checkbox"/> 水 <input type="checkbox"/> 木	金	土 日
備考（祝日も開校			
長期の休み	<input type="checkbox"/> 夏休み	<input type="checkbox"/> 年末年始	<input type="checkbox"/> 春休み
	その他（ゴールデンウィーク休み		
⑤ 1日の開所時間			
開所	9 時 50 分	～	閉所 17 時 45 分
備考（			

⑥ 子どもの人数 (2021年6月7日現在)

子どもの数		人数	特徴、その他(あれば)
就学前		2人	
小学生		13人	不定期登校生(4人)
中学生		9人	不定期登校生(3人)
学 齢 期 超	15~17歳	2人	不定期登校生(2人)
	18~19歳	0人	不定期登校生(1人)
	20歳以上	0人	不定期登校生(1人)
合計		26人	不定期登校生合計 11人
2020年度の年間入会(入学)者数		2人	
2020年度の年間退会(卒業)者数		13人	

⑦ スタッフの概況

常 勤	有給	3人
	無給	0人
非常勤	有給	2人
	無給	0人
ボランティア	有償(実費の支弁など)	1人
	無償	2人

⑧ ホームページ等で公開している情報

<input type="checkbox"/> 理念や特長	<input type="checkbox"/> 学びや活動のようす
<input type="checkbox"/> 入会案内・入会条件	<input type="checkbox"/> 入会金・会費(授業料)・その他費用等
<input type="checkbox"/> 代表・責任者名、役員	<input type="checkbox"/> 団体・スクールの財務状況
<input type="checkbox"/> 在籍している子どもの概況(人数・年齢等)	<input type="checkbox"/> 問い合わせ先や方法
<input type="checkbox"/> スタッフの概況(人数・体制等)	

⑨ 活動内容(複数回答式)

<input type="checkbox"/> 個別の対応や学び 授業形式(講義形式)による学び	<input type="checkbox"/> 学びの成果、演奏や作品などの発表会 居場所提供
<input type="checkbox"/> 社会体験(見学、職場体験など)	<input type="checkbox"/> 相談・カウンセリング
<input type="checkbox"/> 自然体験(自然観察、農業体験など)	<input type="checkbox"/> SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)
<input type="checkbox"/> 調理体験(昼食づくりなど)	<input type="checkbox"/> 受験勉強
<input type="checkbox"/> 芸術活動(音楽、美術、工芸など)	<input type="checkbox"/> 就労訓練
<input type="checkbox"/> スポーツ活動	<input type="checkbox"/> 保護者会、親の会
<input type="checkbox"/> 宿泊体験	<input type="checkbox"/> その他特色ある活動
<input type="checkbox"/> 子どもたちによるミーティング	<input type="checkbox"/> 実行委員会をつくってのイベント、合宿、プロジェクト、海外体験?など

3. 私たちの団体・スクールの理念、学びや活動の特長

デモクラティックスクールまっくろくろすけは「デモクラティックスクール」のやり方・理念に賛同した子ども・家庭が通う学校です。学校に通ったことがない子どもも1/3程度います。中には不登校がきっかけで通いだす子もいますが、どの子どもも体験を経て、この学び方でやっていこうと選択して来ています。

「責任ある言動」「互いの尊重に基づく基本的人権の尊重」を大切にしている、公教育と同じ「普通教育」にあたります。以下の教育理念の基で教育をしていく学校です。

デモクラティックスクールまっくろくろすけは在校生が主体的にスクールの自治を行い、時にはスクールの理念自体やその解釈についても在校生、スタッフで話し合い決めていく学校です。

基本的には子どもが安心して学ぶ場所、個性の尊重、主体性の発揮、スクールの自治を行うことによる責任感を軸に運営されていますが、その時に通っている子どもによってスクールの理念は弾性を持ち、現在の在校生に一番合う形を話し合いによって模索していくことこそがこのスクールの最大の理念と言えます。

スクールとして決まっている学習スケジュールはなく、在学中の時間はすべて自分で管理します。

それにより、主体的に自分のやりたいことや必要なことを実践する経験を積み、自分の行動に責任を持つことができます。

基本的には自分の使いたいことに時間を使うことができますが、スクールの自治は在校生、スタッフで行わなければなりません。スタッフは最低限の事務作業や在校生と話し合っただけの役割は請け負いますが、スクールに関わる決断や日々のスクールで起こる問題の対処などは在校生とスタッフが分け隔てなく知恵を出し合い、解決を目指すことで自分の行動だけでなくスクール全体の事に対しても責任感を持ちやすいと思われまます。

自治とは。

日々のスクール内の掃除や当番制のミーティングの司会、校則の変更、校則を破った子がどのようにすれば過ちを自覚し同じことを繰り返さないかを考え、必要に応じてその子が直していけるようなペナルティを付ける”裁判”や、スクールの年間の開校日や人事、来年度の予算案など全体のことをスタッフ・保護者とともに話し合う”総会”など一言に自治といっても多岐にわたります。

スクールで起こるいろいろな問題や当番、ミーティングを経験することで実際の共同体の自治を学べます。

4. おおむねこの3年間で、私たちが重点的に取り組んできた方針とその方針の背景にあった子どもの状況やニーズ、団体・スクールの状況等

①在校生による自治

スクールの校則やスクールの予算を何に使うかなどを、毎日行われるミーティングで在校生が中心となって話し合い決めていく。問題が起きた時に新しく校則を作る必要があると在校生、スタッフから提案されたときは話し合い、今ある校則と矛盾しないかを確かめたり、前からある校則がもう今のスクールに合わない場合には前からある校則の変更や削除を行う。自分達が従う校則を自分達で決めることにより、組織を現状に合うように主体的に変えていく姿勢を学べる。

学びたいこと、活動したいこと、変更したいことがあればミーティングに参加し、年齢にかかわらず自分の意見を伝える経験を通して自分の意見を申し開きすることに慣れていける。ミーティングでもスタッフが率先して話し合いを導くことはなく、話し合いのやり方自体から在校生で考え、日々の実践の中でより良い話し合いのやり方を模索することができる。「論争ではなく議論ができる」との子どもからの意見で分かるように、話し合いの勝敗を意識するより、中立的で全員が納得する結論を目指すことが多い。長い期間を同じメンバーで自治し、問題が起きれば話し合いをしていく中で一つの議題で意見が違うことがあっても、そのほかの場面で同じ時間を過ごし、ともに活動することで相手の立場や個性を理解することが、対立ではなく建設的に相手にも納得してもらい話し合いの基礎になっている。

②主体的な学び

スクールでは子どもたちが自分のしたいことに責任を持ち、自分で選び活動しています。自分の人生のそのすべてに責任を持ち、行動することを学びます。他者の目には（時には本人にとっても）学びとは思えない活動の中にも学びはあり、本人の意図しない学びに対して向き合うことができる。自分に合ったペースで自分のしたいことを学べることによって、結果には還元されにくい過程にある学びや、必要に応じて目標を考え直すことによって自分の学びたいことの目的を理解することで主体性を学んでいる。

③子どものニーズ

保護者が色んな教育の中から学びを選ばせてあげたいという思いから、見学に来てスクールを気に入って入学した子どももいる。既存の学校では窮屈だと感じ当校の学習スケジュールがないことや自由な校風に安心感を感じて入学した子どももいる。このように既存の学校に不満があり入学する子どもだけではなく、子どものニーズとしては学校以外の選択肢、学校外の居場所という意味合いが大きいと思われるが、最近では学校外の教育の選択肢も多くなり、又デモクラティックスクールの知名度が上がったこともあり、デモクラティックスクールの教育を求めて入学されることも多くなった。移住してきた家庭が半数以上となっている。

5. おおむねこの3年間で、学びや活動において、成果のあった特長的な取組事例（重点的な取組方針に沿った事例をを記述し、その取組について該当する観点①～⑤を選択。加えて、それ以外の特長的な事例があれば、あわせて1～3事例まで記述可。）

観点① 個性や特徴、個性に応じた学びや活動
 観点② 基礎的な学力の習得
 観点③ 体験的な学びや活動
 観点④ 子どもの協同的な学び・活動
 観点⑤ その他

事例（1）	時間割、クラス分けがなく子どもたちが自由に時間を使える。	観点	①②③④
(ア) 取組の概要			
<p>時間割やクラス分けがなく、在校生は自由に時間の使い方を考えることができる。クラス分けや性別、年齢で分けられることなく人間関係も自由に選択することができる。スクールの運営に関わるミーティングでも年齢に関係なく発言、投票できる。</p>			
(イ) 子どもの習得、経験、成長のようす			
<p>自由に時間の使い方を考える時間があるので自分にとって必要なことに集中して時間を使うことができる。子どもたちが今の自分の状況を考え、必要だと思うことを選び学ぶことができる。進学や将来のことを考えて英語や算数などの勉強を始めた子。単純な興味から理科、国語などを勉強し始めた子。興味のあるゲームに真剣に取り組んだり、トランポリンの上で後方宙返りを練習する子など、自分の興味のあることに時間を使うことに慣れていける。又、何かをしないといけないという決まりもないので自分のペースで自分のやりたいことを探したり、周囲と関係を築いていける。年齢で分けられることがないので上下関係が安定せず、流動的に変化することにより複雑な人間関係を体験することができる。その中で自分にあった人間関係の作り方を習得している。</p> <p>「普通では話さない子ども、ここでは話す機会がある」という子どもからの意見を見るに、時間の使い方が自由でゆとりがあることで広い人間関係や自分と違う考えの人とも許容する余裕が生まれている。</p>			
(ウ) スタッフの関わり方			
<p>在校生のやりたいことをサポートすることに努め、スタッフ側から勉強、話し合いへの参加意思、人間関係等、ある一定の経験を推奨することはなく、主体的に物事を経験していけるよう行動する。しかし、スタッフも在校生の選べる自由な人間関係の一人として存在しており、在校生との関係性の上で助言等を行うこともある。子どもとの対等な信頼関係を意識し、ただサポートに努めるだけではないことによって子どもたちに世代を超えた信頼関係や立場の違う人との関わり合いを学べる機会である。</p>			
(エ) さらに充実・発展させるため改善点や方策など			
<p>地域の資源の活用や、いろいろな機関とつながることにより在校生の挑戦できることの範囲を拡大させていきたい。デモクラティックスクールの存在をより一般的に周知してもらうことによってデモクラティックスクールを必要としている子ども・保護者にデモクラティックスクールの存在を知ってもらうための広報の必要性。在校生が増えることによって、多様な意見や価値観に出会う機会の発展が望まれる。</p>			
(オ) 付記事項			
<p>「字を書くのがコンプレックスになった」との在校生からの意見があり、コンプレックスを感じる事も教育の一つではあるが自信を喪失することにつながる危険性が懸念される。読み書きの習得を推奨することは教育理念に関わる問題であり、慎重に対応していきたい。</p>			

追加事例（2）	ミーティングの当番制	観点	③④
(ア) 取組の概要			

ミーティングに参加する在校生が減り、スタッフ以外が参加しないミーティングが時折、行われていたために在校生から現状を変えたいと意見が出たため施行された。
 ミーティングに在校生が参加するためにミーティングの当番制を作り、ミーティングの経験を積み、司会になった時にどのように振舞えばいいか、意見が対立したときにどのように解決したらよいか、などを体験し、習得することを目的とする。在校生の中で在席年数が長い順に3グループ（在籍順にA班、B班、C班）に分け、在籍年数が長く慣れているグループ（A班）がその他のグループを助けながらミーティングを進行していく。
 一番在籍年数が短いグループ（C班）はミーティングの司会や書記を担当せずに、ミーティングに呼び出された人を呼びに行く仕事や話し合われている議題について意見を述べるなどの仕事を担当して、ミーティング自体に慣れていけるように設定されている。

(イ) 子どもの習得・経験・成長のようす

ミーティングの司会、書記を当番制で行うことでミーティングの進行のために話し合われる議題の内容を理解する必要があり、議題を理解する能力が養われることが期待される。
 主体性の教育と反するようにも感じるが、当番制で司会や書記を経験することで、自分では積極的にスクールの自治に関わらない子もスクールの自治に興味を持つ機会になっている。
 実際にミーティングの司会、書記を担当することによって進行する側の気持ちを理解し、ミーティングに参加するときにも進行側の意識をもって参加することが期待できる。A班の子は他のグループを助けることにより自分が司会をできるだけでなく人にも教えられるように理解を深めている。
 施行したときの意図にはなかったが在籍年数の長い子と短い子（または普段接する機会の少ない子同士）が接する機会となり、より在校生間の連帯を強めているように感じる。

(ウ) スタッフの関わり方

スタッフもミーティングに一人は参加するように決まっている。
 現状ではスタッフがミーティングの書記を担当することが多く、司会を在校生のミーティング当番が担当することが多い。スタッフの関わりとしてミーティングを率先して導くことはせずに基本的に在校生の司会のサポートに徹している。ミーティングの進行について決定されていることを司会が忘れていた場合は伝えたり、進行に困っている場合は次の進め方を提案する。B班、C班の子が進行等で困っている場合はA班の子が助言を行うことを理想としてスタッフはミーティング全体を見て足りないところを補足することを求められる。
 もちろん、議題によってスタッフが意見を対等に述べることもありスタッフも貴重なスクールの構成員の一人としてミーティングに参加している。

(エ) さらに充実・発展させるため改善点や方策など

ミーティング当番を嫌がる在校生が多く、ミーティング当番がただの負担と受け止められていないかが懸念される。
 ミーティングの当番制が作られた意味などが上手く伝われば改善されると思うが、スタッフが意味を伝えるのではなく自分で考えて思いつくか、もしくはミーティングの当番制に意味を見つけれずに変更したいとミーティングで発言するのを待つしかない。

(オ) 付記事項

追加事例（3）		観点	
---------	--	----	--

(ア) 取組の概要

(イ) 子どもの習得・経験・成長のようす

(ウ) スタッフの関わり方
(エ) さらに充実・発展させるため改善点や方策など
(オ) 付記事項

6. 子どもの進路について

退会（卒業）の子どもの進路選択の特徴、進路先の具体例、OB・OGの活躍や特記すべき事例など

スクールを退会（卒業）後の進路として約半数が通信制高校、定時制高校に進学している。全日制高校に進学する子はごく少数である。進学しない子の進路はアルバイトが多く、アルバイトを始めたい（始める）からという理由でスクールをやめることを決意する子も多い。最近では進学せずに（スタッフに見てもらおうなど）自力で勉強して高等学校卒業程度認定試験を受けて大学に進学する子もいる。大学に進学せずとも試験に受かることで高校レベルの学力を証明する手段（目標）として試験に挑む子どももいる。

7. 子どもの学びや活動の向上、団体・組織の向上のために、私たちが取り組んでいること（研修・評価など）

スタッフは在校生とのスクールの自治、運営を行う上で信頼関係は必要不可欠である。共にスクールを自治、運営していくために日々子どもたちを理解し、スタッフ自らを理解してもらうように努めている。

地域で開催されている親の会にスタッフが出席し、保護者の相談に乗るなどスクール内だけでない家庭の教育にも相談されれば答え、保護者、子どもたち両方のより良い環境を目指している。

デモクラティックスクールネットに加盟し他のデモクラティックスクール（オルタナティブスクール）と横のつながりを持ち、研修やスクール間のスタッフの交流などの機会を作っている。

スタッフの業務に代表業務という対外的な対応をするスタッフを設け、講演会の参加や勉強会なのにも積極的に参加し他のスクールの情報や教育法の最新情報を集めている。

見学、研修を日々受け入れて、研修に来られた方からはスクールに関する感想や研修中に困ったことやまっくろくろすけに対して思ったことを聞き取り、子どもたちと共有することでまっくろくろすけの外からの意見を取り入れるように努めている。

8. 私たちの団体・スクールの組織・運営について（・どのようなしくみがあるか ・反映した成果の実例 ・今の課題は何か などの観点で記載）

①子どもの意見を反映するしくみ、子どもが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

理念等でも記載されているようにスクールの運営、自治を行う主体は在校生である。ゆえに取り組みとしてスタッフがやっていることはない。（子どもからの意見でミーティングの当番制などは実施された）

毎日AM10:35とPM14:30からミーティングが行われ、スクール内で必要なことを話し合い決定している。ミーティングの参加は基本的に任意で、話し合いたい子が参加しているが、スクール全体に関わる大きい問題には全員参加義務のあるミーティングが開かれる。ミーティングでの意見は年齢、在校年数に関係なく参加者全員が議決権をもち、ミーティングでの決定に責任を持つ。

年に二回の総会が開かれスクールの運営に関わる人事や予算などについてを子ども、スタッフ、保護者三者で話し合い決定をする。人事、予算などの総会で話し合うような大きな議題でも子どもたちが中心となって責任をもち、自分達の希望を含めたスクールの存続の方法を話し合いによって決定する。

②スタッフの意見を反映するしくみ、スタッフが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

スタッフもスクールの構成員として存在していて、担当の日でなくても必要があればミーティングに参加し、議題を出したり、意見を言う。

スタッフも在校生と同じようにスクール内で問題を感じた場合（在校生からの暴言暴力、施設の修理の必要性、新たな校則の施行の必要性など）ミーティングに議題として投げかけ、子どもたちと共に問題の解決を目指すこともある。

スタッフ同士では連携を取り合い、見学者の対応や事務作業が偏りすぎないように気を付け合っている。

③保護者、その他関係者の意見を反映するしくみ、彼らが参加・参画するしくみ、その取り組みと成果について

保護者はスタッフ、子どもたちと並びスクールの構成員の一人です。

保護者の中で一人保護者代表として保護者の意見をまとめ、子ども・スタッフとの連絡係りをお願いしている。年二回(秋、冬)行われる総会では保護者もスクールの運営に関わる人事や予算案の制作に参加します。その総会の準備として保護者会議で保護者側からの議題の提案があれば意見をまとめ総会で話し合います。

日々のスクール内での活動に関しては子どもたちが主体で決定しているが、保護者からも話し合いたい議題(感染症についてなど)の提出があれば臨時総会で話し合うこともある。年間でスクールを支える仕事の中で保護者にも参加をお願いすることを子ども・スタッフで一覧にまとめている。保護者会で立候補がいればお願いしている。できること・得意なことを活かして、スクールの用事してもらうことで、親にとってはスクールのことを理解するチャンスと互いの交流となり、子どもにとっては親も自分たちのために汗を流してくれている姿が見え機会となっている。

9. 安全面で実施・配慮していることについて

緊急時対応マニュアル 安全管理マニュアル 保険対応

その他、実施していること(ある場合に記載)

入学時に各家庭にスクールのある市町村の緊急避難場所をまとめたマニュアルを配布している。消火器、懐中電灯など非常用の備品を定期的に点検している。非常時にすぐに避難できるように校舎の出入り口、窓等のカギをすべて開けるようにしている。校舎を子どもたちが見回りしてケガをしないように危険なものが落ちていたら片付けている。

10. 子どもやスタッフの人権を守るために実施・配慮していることについて

ハラスメント・虐待・いじめなどに関する宣言等

ハラスメント・虐待・いじめなどに関するスタッフ研修

ハラスメント・虐待・いじめなどに関する相談ができる体制や仕組み

その他、実施していること(ある場合に記載)

基本的にはハラスメント・虐待・いじめなどにより被害を被った場合、本人がミーティングで訴え、本人同士ではなく全体の事として話し合いで解決を理想とする。しかしミーティングでの訴えが難しいこともあり、その場合、投書箱に投書しておくことミーティングで問題として扱うように決まっている。子ども、スタッフ関係なく誰かが校則違反をしているところを見つけたときはミーティングで報告することにより、ハラスメント・虐待・いじめがあった場合はミーティングの場で話し合い、次から起こらないように改善している。

11. 学校・行政・地域・団体・NPO・企業等との連携について

①【学校・行政】どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載

在校生の中で出席認定し実習先として認め実習用定期を発行している小中学校に当校日数、活動の様子などを報告している。

必要があれば担当の小中学校の先生・教育委員会の見学を受け入れてスクールを理解してもらいお互いその子を見守る立場としてどのような連携が取れるかの顔合わせをしている。年に2回学校だよりを届けている。県教育委員会と年2回、加古川市・明石市とは年1回意見交換会をもっている。また、在籍生徒がいる教育委員会にはこちらから出向くこともある。県下の議員には積極的に話をしに言っている。今年は子どもからも立候補があり、子どもの意見表明を聞いてもらう機会を作っている。

②【地域・団体・NPO・企業等】どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載

兵庫教育大学とはボランティアセンターを通じて長年交流をしている。学生にこちらにボランティアに来てもらったり、こちらの子が教えて欲しいことを大学に行って習ったりしている。例えば、大学のダンス室でヒップホップサークルの学生に教えてもらったりなど。大学の授業に招いてもらって、「多様な学び」を紹介したこともある。神戸医療福祉大学からもボランティア体験授業の実習先として学生を受け入れたり、学際に地域枠でバンド部が演奏させてもらったりしている。地域の福祉協議会と顔合わせをし、今後どんなことで連携できるかを検討している。

福祉協議会の持つ備品（ポップコーンメーカーやストラックアウトなど）をスクールでイベントをする時に借りることや、車いす講習、ボランティアの講師が必要な時に福祉協議会でも適任の人を探してもらうなど今後の協力が期待できる。

一般社団法人の保護猫施設と連帯して在校生が施設清掃・事務仕事の職場体験をしている。

就労可能な年齢の在校生、卒業生はアルバイトとして保護猫施設で勤務している子もいる。兵庫県下で政策提言等行っている「学校外で学び育つ子どもの権利保障を進める会・ひょうご」、関西の民間施設の交流団体「ふりー！すくーりんぐ」、全国組織「民主ラティックスクール・ネット」「多様な学び確保法を実現する会」などを組織、または加盟して、「民主ラティックスクール」の普及、子どもたちの学びの環境をよりよくするために連携している。

「グローバルビジョン」主催の研修を受け入れ、各地で新しくスクールを始めようとしている人の応援をしている。

12. 団体・スクールの理念を実現し、特長を活かし、学び・活動をより発展させるために、課題となっていることと改善のための今後の方針について

子どもたちが自治を行うこと自体を教育の理念、特性としている都合上、スクールの課題・改善点自体が子どもたちの学びの機会であり、改善方針をその時に通っている子ども、スタッフ、時には保護者を交えなら話し合うことによりスクールとして一貫した改善方針ではないが、その時々最善を考えて試している。

スクールの自治に関心のある子は10代半ばの子が多く、その年代の子が一斉にスクールを卒業・やめる場合には自治のやり方の引継ぎや校則の意味の継承が難しく、スクール内での文化の継承が課題にも感じられるが

校則・文化の必要性を現在の子どもが考え直し、淘汰する良い機会とも思える。

在校生からの提案により”ミーティングのやり方”を制作し、ミーティングの司会に慣れていない子でも進行できるように、明文化されていない自治の仕方に対しても少しずつは改善している。

よりスクールを認知されることにより必要な子どもにも情報が届き、スクールの在校生が増えることを在校生の多くが望んでいる。スクールの在校生が増えることが学びの発展に直接つながっているわけではないが、より多様な意見が出ることにより議論が活性化することや、色々な個性の人とスクールで活動、自治をしていく中で子どもたちが多様なコミュニケーションや自分を理解する機会が増えることが期待される。

フリースクール等（学校以外の学びの場）の自己評価シート

黄色い欄をご記入ください。チェックボックスは該当するものに、チェックをしてください。
 緑色欄は追加がある場合にご記入ください。

1. 団体の概要（フェイスシート）

ふりがな	こうべふりーすくーる		
名称	神戸フリースクール		
所在地	〒 650-001 兵庫県神戸市中央区北長狭通7丁目3-11 坂下ビル2階		
電話番号	078-360-0016	FAX番号	078-965-7100
メールアドレス	freeschool.kfs@gmail.com		
ホームページアドレス	http://kfs.freeschool.jp/	開設年	西暦 1990 年
ふりがな	いっばんしゃだんほうじん こうべふりーすくーる		
設置者・団体	一般社団法人神戸フリースクール		
設置者・団体の性格	法人格を有しない任意団体 NPO法人 <input type="radio"/> 一般・公益社団法人 一般・公益 財団法人 学校法人 準学校法人 その他（		
	社会福祉法人 宗教法人 医療法人 営利法人（株式会社・有限会社等） 個人 行政・公的機関（教育支援センター等）		

2. 活動等の状況

① 受入の対象

受入対象年齢（学齢）	下限 <input type="text" value="7"/> 歳	上限 <input type="text" value="18"/> 歳	※上限、下限が決まってい ない場合は、「なし」と記入
在籍できる上限年齢	上限 <input type="text" value="20"/> 歳		
備考（	）		

② 受入の条件（ある場合に記載）

*子ども本人が入会の意思を持っていること *5日分の体験期間を経ること *自力で通えること（入会時に通えなくても、通おうとする努力ができること） *みんなと一緒にいることを厭わないこと

③ 運営形態（複数回答可）

<input type="radio"/> 通所型 <input type="radio"/> 宿泊型 <input type="radio"/> 訪問型 <input type="radio"/> その他（
--

④ 子どもの学びや活動上の開所日数や時間

開所日数	週 <input type="text" value="5"/> 日	年 <input type="text" value="約200"/> 日
曜日	<input type="radio"/> 月 <input type="radio"/> 火 <input type="radio"/> 水 <input type="radio"/> 木 <input type="radio"/> 金 <input type="radio"/> 土 <input type="radio"/> 日	
備考（	土曜日は、月2～3日中高生の学習日を設定	
長期の休み	<input type="radio"/> 夏休み <input type="radio"/> 年末年始 <input type="radio"/> 春休み その他（ゴールデンウィーク休み	
⑤ 1日の開所時間		
開所	10 時 30 分	～ 閉所 17 時 0 分
備考（	）	

⑥ 子どもの人数（2021年6月7日現在）

子どもの数		人数	特徴、その他（あれば）
	就学前	0人	
	小学生	14人	
	中学生	8人	
学 齢 期 超	15～17歳	8人	
	18～19歳	3人	
	20歳以上	0人	
合計		33人	
2020年度の年間入会（入学）者数		6人	
2020年度の年間退会（卒業）者数		3人	

⑦ スタッフの概況

常 勤	有給	1人
	無給	0人
非常勤	有給	4人
	無給	0人
ボランティア	有償（実費の支弁など）	3人
	無償	0人

⑧ ホームページ等で公開している情報

○ 理念や特長	○ 学びや活動のようす
○ 入会案内・入会条件	○ 入会金・会費（授業料）・その他費用等
○ 代表・責任者名、役員	○ 団体・スクールの財務状況
○ 在籍している子どもの概況（人数・年齢等）	○ 問い合わせ先や方法
○ スタッフの概況（人数・体制等）	

⑨ 活動内容（複数回答式）

○ 個別の対応や学び 授業形式（講義形式）による学び	○ 学びの成果、演奏や作品などの発表会
○ 社会体験（見学、職場体験など）	○ 居場所提供
○ 自然体験（自然観察、農業体験など）	○ 相談・カウンセリング
○ 調理体験（昼食づくりなど）	○ S S T（ソーシャル・スキル・トレーニング）
○ 芸術活動（音楽、美術、工芸など）	△ 受験勉強
○ スポーツ活動	○ 就労訓練
○ 宿泊体験	○ 保護者会、親の会
○ 子どもたちによるミーティング	○ その他特色ある活動
	（夏：キャンプ、秋：子午線ウォーク、年1回：表現展・もちつき会）

3. 私たちの団体・スクールの理念、学びや活動の特長

私たちは、以下のことを大切に活動しています。

- ☆不登校の子どもたちが、安心してすごせる場であること
- ☆子どもも大人（スタッフ）も対等であり、互いに尊重しあいながら活動すること
- ☆子どもたちの主体性を大切にすること、スタッフは子どもの「やりたい！」を尊重すること
- ☆自分のことはできるかぎり自分で、でもできないと思ったら助けを求めること

大人は何かと、子どもたちの危なっかしさに手や口を出してしまいがちですが、そこをぐっと堪え、子どもが安心して失敗できるチャンスをつくります。そのリカバリーについては、大人が寄り添いながら、うまく子どもが自分の力で失敗からリカバリーできるようにしていきます。

また、できないことや難しいことについて助けを求めることができるような関係性（大人も子どもも）をつくるようにしています。何もかも自分でしようと思わなくてもいい、ときには誰かに助けを求めてもいいし、甘えてもいいのだということ、人を頼っていいのだということ、子どもたちが体験できるようにしたいと考えています。

4. おおむねこの3年間で、私たちが重点的に取り組んできた方針とその方針の背景にあった子どもの状況やニーズ、団体・スクールの状況等

①子どもたちに、フリースクールの構成員として活動してもらえるように
スタッフで済ませてきたことも多かったこれまでから少し変化を持たせ、子どもたちにも少しスタッフの仕事を手伝ってもらえる機会をつくっている。小さなことであれば、ごみを出すことであったり、帰りで片付けや掃除をしてもらうこと。ほかのことであれば、毎月の学校への出席報告書類の作成であったり、イベントの幹事など。

②学習面が気になっている子のために
これまで、教科学習は自分のしたいときにすればいい、というスタンスであったが、夕方に学習時間を設け、取り組みたい人だけが残って自習するという仕組みを取り入れている。

通ってくる子どもたちの中には、学習は嫌いだけどやっておかないと…と思っている子も少なくなく、そのような子たちにどうアプローチをしようか考えてきた。そこで、塾の自習室のような感覚で、自分のしたい教材等を持ってきて、みんなが取り組む雰囲気になればできるのでないかと週に1~2回ほど実施。集中して学習に取り組める様子がうかがわれた。

③外の団体ともつながれるように
自団体のイベント以外でも、可能な限り、有志の子どもたちで参加するようにしている。そうすることで、フリースクール自体の活動も幅広くなり、新しい空気が流れるようになったと感じる。

④小学生の野外活動部を実施
フリースクール内での小～高の縦のつながりも素敵なものであるものの、それでもお互いに気遣い合いながら活動している様子が見てとれる。中高生にも小学生に遠慮せずに過ごしてほしい、小学生にも自分たちだけで思い切り遊んでほしい、また、フリースクールに通っていない小学生の子たち（毎日通うのはしんどいけれど、月1くらいなら誰かと一緒に活動するのも悪くないと思っているような子）との出会いを大切にしている。

5. おおむねこの3年間で、学びや活動において、成果のあった特長的な取組事例（重点的な取組方針に沿った事例を記述し、その取組について該当する観点①～⑤を選択。加えて、それ以外の特長的な事例があれば、あわせて1～3事例まで記述可。）

観点① 個性や特徴、個別性に応じた学びや活動
 観点② 基礎的な学力の習得
 観点③ 体験的な学びや活動
 観点④ 子どもの協同的な学び・活動
 観点⑤ その他

事例（1）	自学自習プログラム「夜学（やがく）」「自習日」の実施	観点	①、②
（ア）取組の概要			
<p>これまで意図的に教科学習に取り組んではこなかったが、メンバー（と保護者）のニーズに応えるかたちで考えたのがこのプログラムである。</p> <p>夜学は、全体の活動が終わってから、学習したいメンバーが残って学習に取り組む時間である。学習したい人だけが残ることで、その場にいる全員が学習に取り組むことができる。</p> <p>自習日も同様で、月に何回かの土曜日にフリースクールを開放し、メンバーたちが自習している。</p> <p>参加するのは主に中高生で、高校生は自分の学校のレポートをこなしたり、中学生は自分で教材を持って来たり、フリースクールで教材を用意したりしながら、課題に取り組んでいる。</p>			
（イ）子どもの習得・経験・成長のようす			
<p>みんながいる日中に学習することは難しい（しない人のほうが多いため。）けれど、学習時間を設けること・学習する人だけがいることによって、仲間たちが一緒に学習している環境となり、メンバーたちなりに学習へ意識が向いているようである。学習に気持ちが向かなかったメンバーも、学習に取り組む仲間がいることにより、自分も夜学に残ってみたり、自習日にやって来てみたり、たまにだったのが回数が増えたり、学習への関心の幅が広がったりもしている。</p> <p>このプログラムは、現在、中高生対象としており、小学生はそれを未来の自分の姿として受け止めている様子である。</p>			
（ウ）スタッフの関わり方			
<p>自学自習スタイルであるため、スタッフの介入は最低限にとどめるようにしている。一方で、ひとつひとつ見てもらいたい（教えてほしい）と思うメンバーもあり、そのメンバーにかかりっきりになることもある。スタッフの人数的にも最低限であるため、自ずと関わりは最低限になってしまうというのも事実である。</p>			
（エ）さらに充実・発展させるため改善点や方策など			
<p>☆自習に参加するメンバーが多い日もあるため、スタッフの増員が必要であると考えられる。</p> <p>☆高校生は、単位取得のためのレポートなどの課題が必ずあるが、中学生は必ずしもそうではないため、系統だった課題の進め方を考える必要がある。</p> <p>☆小学生の学習まで触れることができおらずに、心配している保護者もいると聞いている。小学生のための学習プログラムも検討していく必要がある。</p>			
（オ）付記事項			

追加事例（2）		観点	
（ア）取組の概要			

(イ) 子どもの習得・経験・成長のようす
(ウ) スタッフの関わり方
(エ) さらに充実・発展させるため改善点や方策など
(オ) 付記事項

追加事例（3）		観点	
(ア) 取組の概要			
(イ) 子どもの習得・経験・成長のようす			

(ウ) スタッフの関わり方
(エ) さらに充実・発展させるため改善点や方策など
(オ) 付記事項

6. 子どもの進路について

退会（卒業）の子どもの進路選択の特徴、進路先の具体例、OB・OGの活躍や特記すべき事例など

通信制高校を卒業するメンバーたちは、大学に進学する人が大半である。
中には、高校卒業資格をとったのち、アルバイトを続けながら正社員になる人もいたり、少し時間をあけてから、大学進学を考える人もいる。
中学卒業と同時に退会するメンバーたちは、単位制高校や、大手の広域通信制高校に通い始める。

7. 子どもの学びや活動の向上、団体・組織の向上のために、私たちが取り組んでいること（研修・評価など）

☆新しいプログラムにチャレンジするため、絶えず子どもたちのアイデアを取り入れるようにしている。
☆常勤スタッフ（1名）と、非常勤スタッフ（3名）でミーティングを行っている。
☆普段の活動を、保護者にも手伝ってもらえるようにしている。

8. 私たちの団体・スクールの組織・運営について（・どのようなしくみがあるか ・反映した成果の実例 ・今の課題は何か などの観点で記載）

①子どもの意見を反映するしくみ、子どもが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

☆メンバーとスタッフを合わせた全体ミーティングを月1回行っていること。
☆イベントをするときには、動ける子どもたちに（実行委員として）動いてもらうこと。
☆子どもたちの「やりたい」を拾い上げられるよう、スタッフが常に子どもの声に耳を傾けられる状態であること。

全体ミーティングでは、翌月にやりたいことや行きたいところの意見を出し合い、可能な限りそれらを予定に取り込むようにしている。月の予定表をつくる際には、何人かの子どもたちに目を通してもらったり、どんな予定にするかをスタッフと一緒に考えている。

ひとりでも、何かを「やりたい」という声が出たときには、一緒にやってくれそうな仲間を探し、スタッフと一緒に、どうすれば実現可能かどうかを考えている。それが実現されたとき、ほかのメンバーにとっても、やりたいと思えば実行できるのだと、少し物ごとに積極的になる様子を見ることができている。

②スタッフの意見を反映するしくみ、スタッフが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

現実的に人が少なく、常勤スタッフ1名と非常勤スタッフ3名、ボランティアスタッフが何人か、という状態であるが、スタッフもやりたいことをやるようにしている。もちろんお願いすることもあるが、基本的にはスタッフ自身も「やりたいかどうか」で動けるようにしたいと考えている。

③保護者・その他の関係者の意見を反映するしくみ、彼らが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

大きなイベントには保護者の助けが必須であるため、そのときに助けていただきつつ、普段あまり話さないメンバーやスタッフたちと関わる機会になればと考えています。

また、現在はスタッフだけでは回らない日常活動にも、手を貸していただける保護者には積極的にお願いするようにしています。

親の会の茶話会を月1回実施しており、その際にフリースクールでのことを共有し、アイデアをもらうなどもしています。また、個人懇談をする中で、要望などを聞くこともあります。

9. 安全面で実施・配慮していることについて

緊急時対応マニュアル

安全管理マニュアル

○ 保険対応

その他、実施していること（ある場合に記載）

10. 子どもやスタッフの人権を守るために実施・配慮していることについて

ハラスメント・虐待・いじめなどに関する宣言等

ハラスメント・虐待・いじめなどに関するスタッフ研修

- ハラスメント・虐待・いじめなどに関する相談ができる体制や仕組み
 その他、実施していること（ある場合に記載）

11. 学校・行政・地域・団体・NPO・企業等との連携について

①【学校・行政】どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載

《学校》
 ☆出席報告：月1回の出席報告（来日・その月の特記事項を記載）
 ☆来訪の受入：希望があれば、先生の見学を受入（担当の子が在籍している場合）

《行政》
 ☆来訪の受入：上記と関連し、出席認定のための聞き取りを受入
 ☆連絡会議への参加：市や県の教育委員会が開催する連絡会議への参加

②【地域・団体・NPO・企業等】どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載

《地域》
 ☆近所のお店との交流：ハロウィンでの子どもたちのパレード受入の願いをしたり、（今はできませんが）もちつきなどのイベントについて、協力をお願いしたりしています。また、うちの畑で収穫できた野菜を配ったりもしています。

12. 団体・スクールの理念を実現し、特長を活かし、学び・活動をより発展させるために、課題となっていることと改善のための今後の方針について

☆子どもたちの更なる積極的な参画
 子どもたちのできることややりたいと思うことを見出し、さらに積極的に手伝ってもらえるような仕事配分を考えること。

☆スタッフの拡充
 子どもが増えつつも、既に出来上がっているコミュニティに頼っている面がある。スタッフが少ない分、子どもたちが助け合い、スタッフの手となり足となり助かっているが、それでも大人はもう少しいるほうがいいと考えている。不登校の子どもたちの育ちを共に見つめてくれる大人を探していきたい。

☆小学生のための学習プログラムの充実
 小学生が増えてきており、これまでと違った不安やニーズもあるようだ。特に教科学習に関しては、多かれ少なかれ不安に思っている保護者もいる。小学生だけでなく、中学生にも、学習に不安があったり、どうしてもしたくないわけじゃない、という子たちがいる。そんな子たちが学習するきっかけづくりになるよう、プログラムを組んでいきたい。

第4章 相互評価の結果

第3章で示した自己評価シートの記載をもとに、ふおーらいふ、神戸フリースクール、まっくろくろすけが相互に訪問を行った。第2章にも記したように、各団体からスタッフ一名と子ども三名が参加し、訪問先の団体が行っている活動について評価している。スタッフは記述式で評価を行うのに対し、子どもたちについては回答のしやすさを考慮し選択式（自由記述も可）とした。

以下に、相互評価の結果と、他団体からの評価に対するコメントを示す。

1. ふおーらいふの評価結果

(1) 他団体のスタッフによる評価

まっくろくろすけ 児島氏による評価シート

1. スクールの理念や学びの特徴が自己評価シートにあった通りに見えましたか

<書いてあった通りだった点>

特にスクールの活動理念の他者へのいたわりを感じた。

通っている子どもたちが他の子どもをよく見ていることが感じられた。

【自主】【自立】に関しても自分のタイミングでミーティングへの参加ができることや参加しやすいような工夫がしていることが見て取れた。

<違ったと思う点>

少しだけ【自主】【自立】よりも連帯方で子どもたちが動いているように見えるときや体験活動してほしいというスタッフの意図が感じられた。

2. スクールのいいと思った点はありますか（自分のスクールに取り入れたいところなど）

ミーティングへの参加のし易さ。煩わしい手続き的なところが少なく簡潔で参加しやすい。理念の違いからすぐに取り入れられることは難しいが見習いたい。

掃除など物事への参加のし易さ。司会等のし易さ。

見学では上記の事が通っている子に軽い仕事として受け入れられているように見えた。

3. 自己評価シートにあった、重点的に取り組んでいることは見られましたか

子どものしたことができるように考えられているように感じた。

スタッフも子どもに合わせて対応しており子どもに合わせて場所作りを感じた。

4. 自己評価シートにあった、成果の合った取り組み事例は見られましたか

Cafe ミーティングを見学できた。予定に関して子どもたちが率先して意見を言い、その予定が実行可能か話し合っていて子どもたちが主体的に参加できていると思った。ミーティングの部屋にいない子どもミーティングの時に訪れていたりして参加意思を感じた。

話し合いの結果を壁にはり出すことにより視覚的にも話し合いの進行が分かりやすい。

5. 自己評価シートにあった、子どもの学びや向上のための取り組みは見られましたか

残念ながらスタッフの振り返りを見ることはできなかった。

6. 自己評価シートにあった、子どもの意見を反映する仕組みは見えましたか

子どもたちの意見にスタッフが丁寧に対応しているように見えた。

アンケートや自己語りは残念ながら見学できなかったが cafe ミーティングでも子どもが主体に意見を出していたのでスクールの決まり事などにも子どもの意見が反映されていると思う。

7. 自己評価シートにあったスタッフの意見を反映する仕組みはみられましたか

アドバイザーへの相談は見学日には見られなかった。

8. 自己評価シートに書いてあった、安全面のために実施していることや人権、ハラスメント守るための実施は見られましたか

コロナ対策として玄関に体温計、除菌スプレー、足の裏への除菌が実施されていた。

9. 自己評価シートにあった、今後の課題と改善のための方針は見られましたか

生活そのものが学びであるという「理念」に沿って

子どもたちが共に活動する中でお互いに理解し合っていることが見て取れた。

10. 自己評価に書かれていないような、いいところがありましたか

子どもたちのやりたいことの実現しやすさがあると感じられた。

スタッフが細やかに子どもの意見や状態に対応することで成功体験や企画への参加し易さ、ふぉーらいふのアプリで予定の確認ができることや来る日数が少ない子には予定等を送ることで興味のあることに子どもが参加しやすくしている。

色々なことを体験する機会があり、それをサポートするスタッフの動きによって参加へのハードルを下げているように見えた。

1. スクールの理念や学びの特徴が自己評価シートにあった通りに見えましたか

<書いてあった通りだった点>

ミーティングをていねいにしているところ。

<違ったと思う点>

特にありません。

2. スクールのいいと思った点はありますか(自分のスクールに取り入れたいところなど)

コロナ対策をしっかりされているところ。

あの検温装置がいいなあと思いました。

3. 自己評価シートにあった、重点的に取り組んでいることは見られましたか

見学時には具体的に見えていませんが、SNSで見せてもらっているので取りくんでいらっしゃるのわかります。

4. 自己評価シートにあった、成果の合った取り組み事例は見られましたか

子どもの中には、はっきりと自己主張する子もいて、しっかりしている印象を受けました。

5. 自己評価シートにあった、子どもの学びや向上のための取り組みは見られましたか

掲示物をていねいに貼っていらっしゃる場所。

話し合ったものを掲示することにより、子どもたちの理解が深まっているのではないかと思います。

6. 自己評価シートにあった、子どもの意見を反映する仕組みは見えましたか

facebookでもよく拝見していますが、ミーティングでの話し合いであったり、普段の

7. 自己評価シートにあったスタッフの意見を反映する仕組みはみられましたか

スタッフさんが意見を述べるという印象は特に受けませんでした…。

8. 自己評価シートに書いてあった、安全面のために実施していることや人権、ハラスメント守るための実施は見られましたか

掲示物がていねいに、子どもたちとスタッフさんが一緒にいつでも確認できるようにしてあるところ。

9. 自己評価シートにあった、今後の課題と改善のための方針は見られましたか

見学時にはわかりませんでした。日ごろのやりとりで聞かせてもらったり、お互いに共有することもありますね。

10. 自己評価に書かれていないような、いいところがありましたか

メンバーたちの自発的な動きがいいなあと思いました。自分の考えをしっかりと持っている子が何人もいて、すごいなあ。

(2) 他団体の子どもたちによる評価

質問 (1←→4)	平均値	自由記述
スクール全体の雰囲気はどうでしたか？ (緊張する←→居心地良い)	3.5	
みんなが好きなことをしているように見えましたか？ (ぜんぜん←→とても)	3.3	
お部屋の明るさはどうでしたか？ (暗い←→明るい)	3.3	
お部屋の温度はどうでしたか？ (寒い←→暖かい)	2.7	暖かいところは暖かい!
静かに過ごしたい人が、そのように過ごせる雰囲気 がありましたか？(ない←→ある)	2.7	
スクールの感染症対策はどうでしたか？ (できていない←→できている)	3.7	
スタッフは話しかけやすい雰囲気でしたか？ (ぜんぜん←→とても)	3.0	

その他の自由記述

ミーティングが終わる早さにおどろきました。

WiFiのセキュリティが強いと思いました。

みんながおがよかった。

にぎやかでした。

ボランティア活動をたくさんしていて、すごいと思いました。

下の所にあるガチャガチャで、お金をもらっていると聞いて、すごいと思った!!

デモクラティックスクールより生徒の活動に対して大人の関わりが深かったり、ミーティングがラフで話し合いというより、雑談みたいな雰囲気なのが、印象的だった。

元々不登校だった子たちが来ていると思うが、みんな自分のペースでやりたいことをやっているように見えて、こういう場所があってすごくいいなと思った。

※子どもたちが記入する相互評価シートについては、回答のしやすさを優先し、選択式を採用した。たとえば「スクール全体の雰囲気はどうでしたか?」という質問に対して「緊張する」=1点から「居心地良い」=4点までの四件法で、回答を求めた。上表では、子どもたちの回答の平均値を示すとともに、自由記述欄のコメントをそのまま載せている。また、他の団体についても、同様の方法で結果を掲載した。

(3) 評価結果に対する「ふおーらいふ」からのコメント

1) 他団体のスタッフによる評価 へのコメント

「まっくろくろすけ」の児島氏、「神戸フリースクール」の竹林氏、お二人ともがミーティングについて言及されていました。フリースクール ForLife では、日々の活動が子どもたち同士の話し合いによって成り立つため、ミーティングは正に生活の肝です。しかしながら、特にコロナ禍に突入してから、ミーティングへの参加率が減り、一時期は子どもたちの出席がゼロという日もざらにありました。

ミーティング参加率減少に対応するため、スタッフを含めたみんなて試行錯誤した結果、今のミーティング方法(ミーティングを簡潔にする、話し合いが長引きそうなテーマは短時間で何回かに分けて話し合う、議事録を「見える化」する、など)にたどり着きました。今の話し合いのスタイルは子どもたちに合っているようで、ミーティングではいつも活発な意見が出ており、参加のハードルも下がっているように思います。

その一方で、ミーティングを丁寧に行うが故に、話し合いによって決められた予定に沿った、ミーティングありきの生活をしがちなのも事実です。「その場のノリ」を大切にする姿勢が、子どもたち・スタッフ共に求められています。また、スタッフの心がけとして、ミーティングで発言しにくい子どもたちの意見を代弁したり、話し合いに参加しなかった子どもに内容が伝わるよう工夫する(ミーティング後に個別に話す、Twitter やブログ・ふおーらいふ公式アプリで細目に発信する、など)ことで、誰もが置いてきぼりにならないよう意識しています。

その他、児島氏から「体験活動してほしいというスタッフの意図が感じられた」というご感想をいただきました。フリースクール ForLife の理念として、「体験活動を通して、達成感・連帯感・協調性・自分との対峙・自信(自己肯定感)・他者へのいたわり等を獲得する」という考えがあります。したがって、スタッフには体験活動の機会(例えば、自然体験活動やキャンプ体験、卒業旅行など)をなるべく提供しようとする姿勢があります。体験活動もあくまで子どもたちの話し合いにより進んでいき、自主性が重んじられていることには変わりないですが、この体験活動を大切にする姿勢が子どもたちにプレッシャーとならないよう、いつも気を付けています。

2) 他団体の子どもたちによる評価 へのコメント

まず、『お部屋の温度はどうでしたか?』の設問意図ですが、相互評価が行われた当時、コロナ禍に対応すべく、スクールは常に換気されており、感染症対策は十分に講じられている一方で、暖房の

効きが悪い状況にありました。もちろん、いつも暖かいのがベストなのですが、その暖かさの感じ方も人それぞれですので、他スクールの子どもの感想を参考にしたいと思い、質問させていただきました。

「暖かいところは暖かい!」と優しいご意見もいただきましたが、評価の平均値をみると、2.7と低いので、やはり他スクールの子どもの寒いと感じていたようです。相互訪問後、スクールの暖かさを保つためにみんなで話し合った結果、時間が分かるようタイマーを導入し、一時間ごとに5分程度換気するようになりました。換気している時間は当然寒くなりますが、常に換気していた以前と比べると一日を通して暖かくなったように思います。

自由記述でも、たくさんの温かいご感想をありがとうございました。ForLifeに通う子どもたちも、皆さんが来てスクールのことをたくさん褒めてくださったので、大変嬉しそうにしていました。また、デモクラティックスクールとフリースクールの違いについて考えてくださった人もいて、ForLifeに通うみんなにとっても、自分たちの居場所について考える良い刺激になったと思います。皆さん、ぜひまた来てくださいね!

2. まっくろくろすけの評価結果

(1) 他団体のスタッフによる評価

ふぉーらいふ、大橋氏による評価シート

1. スクールの理念や学びの特徴が自己評価シートにあった通りに見えましたか

<書いてあった通りだった点>

スタッフやボランティアのみならず、子どもたちの間でもスクールの理念、特に「責任ある言動」が大切にされている点。ペナルティを素直に受け入れる子どもの姿が印象的だった。

<違ったと思う点>

特になし

2. スクールのいいと思った点はありますか（自分のスクールに取り入れたいところなど）

部活制。元々まっくろくろすけの取り組みとして部活制度があるわけではないと聞いたが、実際には「料理部」など、同じ趣味や目標を持つ子どもたちの自然な集まりができていた。「料理部」のように、子どもたちが自発的にグループを形成し、自治することで、子どもたち同士の関係がさらに深まっているように思われる。

3. 自己評価シートにあった、重点的に取り組んでいることは見られましたか

ミーティングの様子を見るに、日常的に子どもたちによって自治ができていると思われる。また、子ども発の提案で夏祭りや誕生日会の実施がなされているのを見るに、子どもたちがそれぞれに主体的に学ぶことができていると思われる。

4.自己評価シートにあった、成果の合った取り組み事例は見られましたか

「ミーティングの当番制」が機能しているか否かは、一度きりの視察では分からなかったものの、今回見学させていただいたミーティングでは、司会や書記の役割が十分に果たされていた。

5.自己評価シートにあった、子どもの学びや向上のための取り組みは見られましたか

毎日のミーティングやスクールの運営に子どもたちが積極的に参加するまっくろくろすけの実践は、子どもたちの学びやスクールへの所属意識を高めている。フリースクール ForLife の子どもの一人は、まっくろくろすけのことを「一つの国のようだ」と表現していた。

6.自己評価シートにあった、子どもの意見を反映する仕組みは見えましたか

ミーティングの頻度が多く、また意見箱も機能しており、子どもの意見を反映しやすいように思われる。

7.自己評価シートにあったスタッフの意見を反映する仕組みはみられましたか

ミーティングにはスタッフも参加しており、スタッフが率先して話し合いを導くのはまっくろくろすけの理念に反するものの、意見を反映する仕組み自体は整えられていると考えられる。

8.自己評価シートに書いてあった、安全面のために実施していることや人権、ハラスメント守るための実施は見られましたか

いじめ・ハラスメントが起きやすい場所として、屋根裏等、スタッフや子どもたちの目が届きにくい場所があったが、少なくとも視察に伺った日はボランティアが数人おり、子どもに関わる大人の人数でカバーできていると思われる。

9.自己評価シートにあった、今後の課題と改善のための方針は見られましたか

自己評価シートには、広報の必要性にも触れられていたが、その一方で SNS の活用を試みる子どももおり、課題解決に向けての方策が練られていた。

10.自己評価に書かれていないような、いいところがありましたか

外遊び(トランポリン、鉄棒、バスケットボール、縄跳びや鬼ごっこ等)が、スクールの広い敷地を利用して盛んに行われており、子どもたち、特に年少者に活気がある。

神戸フリースクール 竹林氏による評価シート

1. スクールの理念や学びの特徴が自己評価シートにあった通りに見えましたか

<書いてあった通りだった点>

子どもたちが主体的に自分のしたいことをしているところ。

<違ったと思う点>

特に感じられませんでした。

2. スクールのいいと思った点がありますか（自分のスクールに取り入れたいところなど）

意見がある場合、紙に書いておいておくという点。うちも投書箱を試そうと思いつつながら実行できていませんが、ミーティングで話すにはちょっと、という子にはいいなあと思いました。

3. 自己評価シートにあった、重点的に取り組んでいることは見られましたか

子どもたちが主体的に動くということ。

4. 自己評価シートにあった、成果の合った取り組み事例は見られましたか

具体的に見られたものはなかったものの、子どもたちが自分の思うように自由な時間を使い、仲間たちやスタッフたちとその時間を共有することにより、遊びでも学習でも、自分の興味関心にそって動き出すのだろうなあと感じました。

5. 自己評価シートにあった、子どもの学びや向上のための取り組みは見られましたか

学習しようと思う子が、学習しようと思うタイミングで部屋を使えるのはいいなあと思いました。そこについてくれるスタッフさんがいるのもいいなあって。

6. 自己評価シートにあった、子どもの意見を反映する仕組みは見えましたか

子どもたちが主体的に動くこと、子どもたちによる自治という点で、見えました。

7. 自己評価シートにあったスタッフの意見を反映する仕組みはみられましたか

スタッフも子どもたちと一緒にミーティングに参加するなど、意見も対等に言っていました。

8. 自己評価シートに書いてあった、安全面のために実施していることや人権、ハラスメント守るための実施は見られましたか

トランポリンなどの設備点検やお布団を干すなども、子どもたちと当番制でみているなど、すごいなあと思いました。

9.自己評価シートにあった、今後の課題と改善のための方針は見られましたか

地域とのつながりをさらに構築していこうとしている視点があります。ミーティングの当番については、見学の際は緊張しながらもきっと「やろう」と思うメンバーだっただろうと思うので、特にそれが負担になっているようには感じられませんでした。

10.自己評価に書かれていないような、いいところがありましたか

お部屋がいくつもあって、思い思いに子どもたちが使えるのがいいなあと思いました。

トランポリンの存在はとても羨ましかったです(笑)。

こたつで寝てもいい、というのも興味深かったです。この広さならでは!だと思いました(うちのフリースクールで寝ることはあまり好まれません…)。

それから・・・お伝えしてありますが、ミーティング時の注意やペナルティ、その際の指摘(根拠?)に対して、メンバーたちが素直に受け入れているのも印象的でした。それはルールが徹底されているからでしょうし、子どもたちもそれを理解しているからということなのだなあと思いました。

(2) 他団体の子どもたちによる評価

質問 (1←→4)	平均値
ルール・システムについてどう思ったか (まだまだ←→よくできている)	3.6
ルール・システムについてどう思ったか (複雑←→わかりやすい)	2.3
居心地のいい雰囲気であったか (ぜんぜん←→とても)	3.3
スタッフとメンバーは対等に見えましたか (ぜんぜん←→とても)	3.9
まっくろの理念(やり方)についてどう思いましたか? (分けわからん←→良いと思う)	3.4
まっくろくろすけに通いたいと思いましたか (ぜんぜん←→とても)	3.0
自分のスクールと違うと思いましたか (ぜんぜん←→とても)	3.5
うるさいと思いましたか? (ぜんぜん←→とても)	2.8
子どもたちがスクールを作っていると思えましたか (ぜんぜん←→とても)	3.9

ミーティングでは参加者が対等に話し合えているように見えましたか (ぜんぜん←→とても)	3.6
メンバーがまっくろくろすけの事を好きなように見えましたか? (ぜんぜん←→だいすき)	3.8
自分のスクールに取り入れたい所はありましたか (ぜんぜん←→いっぱいあった)	2.7

その他の自由記述

責任をすべて自分たちでとるという所をふぉーらいふにもとりいれていきたいと思いました。 あとは、とてもみんなが話しやすかったので、よかったですと思います。
明確なルールがある事やミーティングが毎日なのは違ってるなと思いました。 みんな楽しそうでした。
終わりの会で、「全員招集。」で皆が集っていることがすばらしいと思った。皆、人の話を真げんに聞いているところが良かった。みんなで仲良くなれるようなイベントを増したいと思った。 「～部」みたいなものを、Forlifeに取り入れてみてもいいと思った。

(3) 評価結果に対する「まっくろくろすけ」からのコメント

1) 他団体のスタッフからの評価へのコメント

各スクールのスタッフの方たちからの評価や子どもたちの自由記述でも自治のためのミーティング、当番制、ペナルティへの態度について触れてもらったことがまっくろくろすけは理念と同じように実在も子どもが主体で自治をしているスクールだと見てもらったようで安心した。

For Life 大橋さんの評価シートにあった「まるで一つの国のようだ」という子どもからの感想はまっくろくろすけが自分たちで自治をしていることの証のように思えてうれしかった。

立地的な面でもまっくろくろすけは他の2校と違い田舎にあるので校舎が広く、トランポリンや鬼ごっこができる敷地もあるのでそのような施設面も評価してもらえたことはまっくろくろすけでは当たり前になっていたことへ(スクール内で眠ることへの評価など)の再発見のよい機会になった。

2) 他団体子どもたちの評価へのコメント

子どもたち用のふりかえりシートの作成は、メンバーたちへ個別に他団体のメンバーがまっくろくろすけに来た時に聞いてみたい事を募集し担当の児島が抜粋した。

メンバーより多くの質問項目が集まり他の団体より項目数が増えてしまったが中には「美人、カッコいい子は居ましたか」などの質問もあり報告書制作時にも再度抜粋した。

「うるさいと思いましたか?」という項目はメンバーよりまっくろは叫ぶ子などが居て自分たちはうるさいと思うが他のスクールから見てどう見えるか知りたいと要望があったので項目に加えた。

ありがたいことに他団体のスタッフからの評価と同じようにメンバーが主体で自治をしていると見てもらえたことが評価の点数や自由記述でも見て取れて自信につながった。

反面、評価項目の「まっくろくろすけに通いたいと思うか」に対して4点満点3点という他の質問と比べると少し低い点がついていたところや「自分のスクールに取り入れたいところ」なども相対的に点が低く、自分の通うスクールとまっくろくろすけのやり方や理念の違いを感じ取っての評価が興味深かった。

3. 神戸フリースクールの評価結果

(1) 他団体のスタッフによる評価

ふぉーらいふ、大橋氏による評価シート

1. スクールの理念や学びの特徴が自己評価シートにあった通りに見えましたか

<書いてあった通りだった点>

- ・子どもの意見が尊重されている点。例えば、大倉山公園へ出かける際には、そもそも公園へ行くかどうか、いつ帰るのか、は子どもたちそれぞれで決めることができていた。
- ・子どもが安心して過ごせる点。子どもたちの様子を見るに、初めて会う人に対しても、リラックスして接することができていた。

<違ったと思う点>

- ・特になし

2. スクールのいいと思った点はありますか（自分のスクールに取り入れたいところなど）

- ・子どもたち一人ひとりに対し、持ち物を入れるための大きめの箱が用意されており、それぞれが思い思いのものを入れるスペースが確保されていること。
- ・『大型テレビは午後1時から使用可』といったような、子どもたちの目に配慮したルールがある点。

3. 自己評価シートにあった、重点的に取り組んでいることは見られましたか

- ・全体ミーティングが月1回実施されており、子どもたちがスクールの活動を自分事として考えられている様子が伺えた。

4. 自己評価シートにあった、成果の合った取り組み事例は見られましたか

・見学者に対し、子どもたちが自らフリースクールの紹介をしており、居場所の一員として自覚的に活動できていた。

5.自己評価シートにあった、子どもの学びや向上のための取り組みは見られましたか

・スタッフに漢字の書き取りプリントを見せている子どもがおり、自学自習ができている様子が伺えた。

6.自己評価シートにあった、子どもの意見を反映する仕組みは見えましたか

・ミーティングで使用されるホワイトボードには、子どもたちの「やりたいこと」が反映されており、自己決定権が尊重されていた。

7.自己評価シートにあったスタッフの意見を反映する仕組みはみられましたか

・上述のホワイトボードには、スタッフ発の企画もあり、スタッフの意見も形になる仕組みが見られた。

8.自己評価シートに書いてあった、安全面のために実施していることや人権、ハラスメント守るための実施は見られましたか

・スタッフと子どもたちの関係は良好であり、相談しやすい空気作りができているように思われる。

9.自己評価シートにあった、今後の課題と改善のための方針は見られましたか

・見学时、子どもたち 20 人前後に対しスタッフ 1 人の体制だったが、自己評価シートにも課題として挙げられていたとおり、やはりスタッフ数が不十分と思われる。しかしながら、スタッフが足りない分を補うかのように、年齢の高い子が年下の子の面倒をしっかりと見ており、子どもの自立を促すという面では良い効果があるようにも思えた。

10.自己評価に書かれていないような、いいところがありましたか

・子どもたちが描いた絵や、イベントの際に使用したと思われる立て看板などが至る所に展示されており、にぎやかで生き生きとした印象を受けた。

・ドッジボールが当たり泣いてしまった子を他の子が慰めており、子どもたち同士の関係に温かみが感じられた。

まっくろくろすけ 児島氏による評価シート

1.スクールの理念や学びの特徴が自己評価シートにあった通りに見えましたか

<書いてあった通りだった点>

子どもたちがリラックスしているように見えた、色々な人間関係の中で自由に行動していたと思う。

日常的にリラックスして関係を築いていると思う。スタッフ、子どもが同じような目線で話しているように見えた。

公園に外遊びに行くときに子どもたちが自分でどこに行くかを決めていて子どもたちが信頼されて任されているように感じた。

<違ったと思う点>

一日の見学ではわからないが子どもたちの「やりたい」を尊重する仕組みがあまり見えなかった。自由に時間は使えているように見えたが全体の中で主体性を発揮するチャンスはあまりに感じなかった。

3. 自己評価シートに書いてあった重点的に取り組んでいることは見られましたか

スタッフの仕事を子どもが手伝っているのは見られた。

施設案内を子どもが担当してくれたり、スクールの備品買い出しをやっていたり、予定表の配布を手伝ったりしていた。

子どもたちも特に嫌がる様子もなく自分の仕事と思っているようであった。

仕事の分担はスタッフが向いている子どもに仕事を振っているが子どもは特に不満はないようだった。

「やることができ別にはいやではない」といっていた。

学習面、他団体との関わり、小学生の野外活動は残念ながら見られなかった。

4. 自己評価シートにあった、重点的に取り組んでいるところはみられましたか

残念ながら夜学を見学できなかった。

5. 自己評価シートにあった子どもの学びの向上のための取り組みは見られましたか？

スタッフでのミーティングは残念ながら見学できなかった。

子どもたちのアイデアを取り入れる姿勢は神戸フリースクールの子どもたち、スタッフと話す事で理解できたがスケジュールなどを見ても実際に子どもたちのアイデアがどの程度取り入れられているかは一日ではわからなかった。

6. 自己評価シートにあった、子どもの意見を反映する仕組みは見えましたか

見学日に公園に行くことになったが子どもたちがどのように行動するかを決めていた。

日常的に子どもが自己判断で活動している様子だった。

全体ミーティングは残念ながら見学できなかったが過去に子どもの企画でサイコロを振って出た目の場所に旅行に行くや、性能の良いPCが欲しいという子どもからの声を聴いて手配してあったりと子どもの意見が実現されていたと思う。

7. 自己評価シートに書いてあったスタッフの意見お反映する仕組みは見られましたか

スタッフが一人したお会いできなかったのでわからない。

9. 自己評価シートにあった、今後の課題と改善のための方針はみられましたか？

スタッフがいない時でも子どもたちが自主的に安全面や行動に責任を持っているように感じた。
仕事の分配に関しては子どもからは不満はなかったがスタッフがどの子にどの仕事に適任化を判断しているので仕事量に対する不満や、やりたい仕事をできているかの確認がスタッフに一任されてしまっているとスタッフ個人のコミュニケーション力頼りになっていないか懸念したが現状は子どもの何人かに話を聞き、活動を見る中では問題は感じなかった。

小学生の学習プログラム、スタッフの拡充に関しての方針、改善は残念ながら見学の日には見られなかった。

10. 自己評価シートに書かれていないような、いいところがありましたか

校舎内のデザインが子どもの興味を広げやすいように物が見えるように収納されており
尚且つスペースを区切ることで少人数で活動がしやすいようにデザインされているように見えた。
テーブルなどが点在していて自由に行き来しながらも自分の過ごしやすい大きさの空間を選べるようにデザインされているのが素晴らしいと思った。

収納されているものから近くで遊べることで片付けを容易にし、興味を持ったことをやりやすいように工夫されていると感じた。

(2) 他団体の子どもたちによる評価

質問 (1←→4)	平均値	自由記述
入ったときの雰囲気が、楽しそうだった (ぜんぜん←→とても)	3.7	
挨拶してくれた人がいた (ぜんぜん←→たくさん)	3.4	
みんなが好きなことをしているように見える (ぜんぜん←→とても)	3.7	
居心地のいい雰囲気である (ぜんぜん←→とても)	3.7	
空間の使い方を工夫していると感じる (ぜんぜん←→とても)	3.5	
小学生から高校生のメンバーの関係性がよさ	3.7	

そうだ(ぜんぜん←→とても)		
子どももスタッフも対等な立場で関わっているように見える(ぜんぜん←→とても)	3.3	スタッフさんが子供たちの意見を尊重していたため、対等とはまたちがったいい関係

その他の自由記述

〇〇〇くんがかわいかったのとまっくらとくらべてすごくすかですごしやすかったです。
すごく楽しそうだった。空気がいい。
<ul style="list-style-type: none"> ・予定を先に1ヶ月間決めておくことで見通しやしたいこの計画がたてやすくいいなど。 ・としうえの人のめんどうみがいい。 ・一人一人楽しそう ・持ち物 Box がある ・はりものがおおい ・すごしやすいシステム ・子供たちのことをそんちょうされている。(はりものが多いことから分かる) ・広い ・色々なことができる(と思う)(ボードゲームから音楽)
わきあいあいとしていた。

(3) 評価結果に対する「神戸フリースクール」からのコメント

1) 他団体のスタッフによる評価 へのコメント

仲間たちとの体験活動を主軸としながら、学習面にも手を伸ばしてみようと考えつつも、できるだけ子どもたち自身の自主性を尊重しようと思うと、日常活動の中に学習を取り入れることの難しさを感じています。空間的に遊びの場と学習の場を分けて確保できれば、日常活動の中でうまくやりくりできるでしょうけれども、学校とは違い、それをするのは難しいところです。そのため、時間的な工夫として、学習に取り組もうとする子どもたちは残って学習するというスタイルにたどり着きました。

おっしゃっていただいているように、子どもたちはスタッフから頼まれたことを本当によく引き受けてくれます。子どもと大人の関係の中でも、“持ちつ持たれつ”なのです。仕事やお手伝いを引き受けてくれる人の偏りが無いとは言えないので、頼みごとのバランスはスタッフ自身が気をつけなければならぬところであり、言いたいことがあるときにはスタッフにきちんと伝えられるような関係を築くよう、引き続き心がけたいと思いました。

当スクールでの活動は、子どもたちもスタッフも一緒になって楽しむことが多いように感じます。そうするように意識しているともいえます。子どもがしたいことも、大人がしたいことも、どちらも対等で

あること、希望者が少ないから“できない”のではなく、みんなにも興味を持ってもらえるようにスタッフも動く、ということ意識しています。子どもの発案も、大人の発案も、どちらも大切。また、プログラムへの参加はできるだけ本人が決められるよう、やりたい人が“やる”、そうでない人は“やらない”という選択が限りなくできるようにとも考えています。これをしていると、やらなかった子の中から“やってみようかな”と気持ちに変化したりする場合も出てくるのです。そんなとき、スタッフは「よしっ!」と思います。躊躇していた足を一步踏み出す感じ。これは、仲間の中にいなければ味わえない体験だと思います。

コメントにあるように、活動内容によっては、子どもたちとスタッフの関係性に委ねられることもあるかと思います。スタッフが独善的にならないよう意識しなければならないと改めて感じました。

2) 他団体の子どもたちによる評価 へのコメント

幅広い年齢層の子どもたちがいるのですが、それぞれがどの年齢層とも上手に付き合えている関係を見てくれてありがたく思いました。

スタッフから見ると、子どもたちはお互いがくっつきすぎず、離れすぎず、適度な関係性を築くことができているように感じています。これはスタッフが介入してできるものではありません。子どもたちそれぞれが体得している術なのかもしれません。

ものが多すぎて雑然としている感じはどうなのだろうと思っているのですけれど、外から見た子どもたちからいい評価をしてもらえると安心できました。貼りものはさすがに多すぎるように思うので、ちょっと整理しないとな～と思いましたけれど・・・。

第5章 自己評価・相互評価をふりかえって

本報告書ではここまで、兵庫県で一条校の枠外にある学びの場が行った自己評価・相互評価の取り組みについて、その経過と結果を示してきた。最後に、この取り組み全体を振り返りながら、その意義や課題についてまとめていきたい。

第1節 評価を行ったことの意義

自己評価・相互評価を実施したことの意義としては、(1) 自団体の取り組みを省察する機会になったこと、(2) 学校外の学びの場に対する信頼性を高めるための道筋が明らかになったことの二つがある。

(1) 省察の機会

今回の取り組みに第三者の立場で参与した武井・橋本は、自己評価・相互評価が適切に実施されているかを確認するとともに、評価活動を経て各団体でどのような成果・課題を認識したかについてヒアリングを行った。そこで明らかとなったのは、他団体からの評価を通じて自団体の取り組みを省察する(再度の自己評価を行う)実践家の姿である。

ふおーらいふでは、子どもとスタッフがともに参加して行われるミーティングが、日々の活動内容や居場所内での過ごし方を決めるための重要な場となっている。ただ、相互訪問の時に行われた話し合いのなかで「ミーティングが重要視されるがゆえに日々の生活が窮屈になってしまう面があるのではないか」という声が挙がった。この問題については、理事長の中林氏が、後日のインタビューで次のように語っている。

実はそれはスタッフ間では時々話題になるんですね、スタッフにシェアしたときに。何でもが予定に含まれなかったら、やりたいことができないっていうようなことには、ちょっと場として違うんじゃないか。「やっぱり今日やろうぜ」って、「今やりたいよ」って言ったときに、それができるのがフリースクールだよって話は散々してたんですけども。それはもう既に子どもたちはそういうものだと思ってしまうと、何か刷り込まれてしまってる部分もあり。それはほんとに、ある意味すごい不自由な思いをしながらやってるんだなっていうふうに、反省させられた点でもありますね。

もちろんふおーらいふのスタッフとしても、ミーティングを大事にするからこそ時にその弊害が生じる可能性があることを、十分に認識はしている。ただ、相互訪問をきっかけに改めて指摘がなされれば、ミーティングの存在が自団体の活動を縛ってしまう危険性がある点を、スタッフとしても意識化することができる。また、ミーティングだけが全ての決定の場ではないことを、子どもたちに伝えていくための機会ともなるだろう。本報告書の第4章では、相互評価の結果に対するふおーらいふから

のコメントも載っているが、そのなかでも「その場のノリ」を大切にする姿勢を持つことやミーティングで発言しにくい子どもたちの意見を代弁することの重要性について言及がなされていた。

同様の省察は、神戸フリースクールやまっくろくろすけにおいても見られる。たとえば神戸フリースクールの竹林氏は、後日のインタビューで次のように語っている。

私自身はそんなに子どもたちを引っ張って何かしようっていうふうには思わないように、しないように意識はしてる反面、でも一緒にやっちゃうと私も意見したくなるし、私もアイデア出すし。で、大人がアイデア出すと、割とうちの子たちは「それいいね」って。私も何の気なく言うんですけど、別にこれを採用してほしいわけでも何でもないんだけど、何の気なく言うって「それいいね、チクリン」っていうふうには。「それでいこう」っていうふうには、そっちに確かに流れがちなところはあったりとかするので。多分そのへんを、(まっくろくろすけのスタッフである) 児島さんは見て取れたというか透けて見えたというか……。それはある意味、よく言えば信頼関係ができてるっていうふうには受け止めるようにはしてるんですけど。でも、あんまり引っ張りすぎないようにもっと意識しないと。確かに……。子どもたちの面白いアイデアを引き出せるような環境っていうのを、もっと作れたら面白く、もっと面白くなるんだろうなというのは、児島さんの言葉聞いて、そうかってすごく印象には残ってるんですけど、実は¹⁾。

児島氏は相互評価に際して神戸フリースクールを訪れた際、「ミーティングの場などスタッフが子どもと一緒に意思決定を行うプロセスで、ともすると子どもが自らのアイデアで何かに挑戦する機会を奪ってしまうこともあるのではないか」という点を指摘した。これに対して竹林氏は、スタッフのアイデアを子どもが受け入れてくれることは「信頼関係」の証しであるものの、スタッフとして子どもたちのことを「あんまり引っ張りすぎないように」意識する必要もあると述べている。確かに、子どもとスタッフが対等な立場から意見を出し合っているのであれば、それはフリースクールが民主的に運営されていることを示すものとなるが、大人と子どもの関係はどうしても権力性を帯びやすい。おそらく竹林氏はこの権力性の問題を認識したうえで、子どもの「アイデアを引き出せるような環境」をつくる必要があるという点に言及していた。子どもの自己決定権や意見表明権を保障し、安全・安心の場をつくり続けていくためにも、他団体からの評価を契機として自団体の取り組みを見つめ直すことが重要だと言えよう。

(2) 信頼性の向上

併せて、自己評価・相互評価に取り組むことそのものが、一条校の枠外にある学びの場(オルタナティブ・スクール)そのものに対する信頼を高めるという点を指摘したい。

今回の取り組みに参加したのはデモクラティック・スクールやフリースクールと呼ばれる施設であ

¹⁾ () 内は筆者による補足を、「……」は省略をあらわす。なお、文中に登場する「チクリン」は竹林氏のニックネームである。

るが、広く社会に知られている存在かという点、おそらくそうではない。なぜならば、多くの人がデモクラティック・スクールやフリースクールを利用した経験がなく、子どもが一条校に通うことを当たり前だと考えているからだ。そこで重要となるのが、オルタナティブ・スクールが自団体の活動についてその透明性を保つことである。他団体が視察に訪れても特に問題がない実践を行っているという事実は、子どもの権利が不当に侵害されていないことを意味する。今次の相互訪問では、スタッフだけでなく子どももメンバーに加わっているが、これには子どもが相互に「本音」を語りやすくなるという意義も認められる。デモクラティック・スクールとフリースクールでは設立理念や運営方針、あるいは活動実態に違いがあると言われているが、あえてその違いを浮かび上がらせながら評価を実施することは、閉鎖的・排他的な考え方を持つ団体ではないことを証明するものと言えよう。

なお、一条校の枠外にある多様な学びの場に対しては、その健全性をチェックするための仕組みを設けるのが難しく、どのような意図を持った団体であっても参入ができてしまう状況にある。やや極端に言えば、子どもが安全・安心に過ごすことなど到底できないような実践を行っていても、「フリースクール」と名乗ることができる。また、残念ながら、不登校児童生徒を不必要に長く囲い込むなど、営利を主たる目的としているのではないかと疑われるような団体が跋扈する可能性も否定はできない。ゆえに、子どもの最善の利益を保障するという観点に立てば、各団体が掲げる理念や目標を尊重しつつも、そこが安全・安心に過ごせる場となっているかどうかを確認することの意義は大きい。一条校の枠外にある多様な学びの場を利用する子どもたちの権利保障を実現するうえで、自己評価・相互評価は有効な取り組みであり、行政にはそれを財政面などから支援することが求められよう。

(文責:武井)

第2節 評価から見えた課題

自己評価・相互評価を実施するなかで見えてきた課題については、(1) 評価の方法に関する点、(2) 相互訪問の実施体制に関する点、(3) 行政からの支援を受けるための道筋の描き方の三つがある。

(1) 評価の方法

今回の相互評価では、訪問時に記入するシートの様式を団体ごとに作成し、項目等は各団体の裁量に委ねられた。しかし、他団体との比較のためには、項目や指標が一定程度統一されている必要がある。とはいえ、各団体の理念は実践にも反映されているため、それを無視した形式をとることはできない。したがって、共通の設問を設定したうえで、団体ごとに理念等を反映した独自の設問を作成するという折衷案が考えられよう。

また、今回はスタッフとともにメンバーも訪問に同行し、相互評価に参画した。スタッフの言語化能力との差を考慮し、メンバーには既述の少ないシートを別途用意したが、それでも言語化に不慣れたメンバーの声を十分に汲み取ることはできなかった。この課題への向き合い方は、それぞれの団体によって異なるであろうが、いずれにしても、多様なメンバーの声を評価にどのように反映させる

かが今後の課題である。

(2) 相互訪問の実施体制

今回の相互訪問では各団体につきスタッフ 1 名、メンバー 3 名と人数を絞り込んだが、それでも団体の規模によっては、場の雰囲気が変わってしまうことがあった。各団体の日常を侵襲するような訪問は好ましくないため、訪問先の規模に応じて、さらに人数を絞り込むことを検討すべきだろう。

また、SNS を通じて所属団体を越えてメンバー同士がつながることによるトラブルなどへの懸念も出された。もちろん、メンバー同士の交流は歓迎すべきものではあるが、未成年のメンバーがスタッフ等の知らないところで自由につながることには、不安が残る。SNS によるトラブル等を回避するための独自ルールを設けている団体もあるが、SNS への向き合い方は団体により様々であり、ある団体のルールを他団体にも求めることは難しい。振り返り際には、打開策として相互訪問の際のグランドルールを定めることが一つの案として浮上っていた。上記のような懸念を少しでも和らげるために、メンバーの SNS 利用に関する取り決めを事前しておく必要があると思われる。

さらに、相互評価実施に必要な時間についても検討することが必要である。今回は団体ごとの特性を尊重した評価を行うことを企図してあえて 1 日の設定としたが、スタッフからの振り返りにもあったように、実践の一部しか確認することができないため、包括的な評価が難しくなる。何に重きをおいて評価を行うのかによって、評価に必要な日数は柔軟に変化させる必要があるのかもしれない。

(3) 行政からの支援を受けるための道筋の描き方

そもそも、今回の自己評価・相互評価の取り組みは、行政の支援を受けることを最終目標として始まった。しかし、今回の取り組みが直接的に行政の支援につながるわけではない。どのようなステップを踏んで、行政の支援を受けられることを目指すのか。海外のオルタナティブスクールにおける評価の事例等も参考にしながら、ロードマップを作成することが求められる。

(文責:橋本)

第3節 各団体によるふりかえり

(1) ふおーらいふ

今回の自己評価・相互評価で最も意義があったのは、フリースクールやデモクラティックスクールが、子どもたちにとって安全で安心な居場所であることを、各団体が相互に確認できた点にあると思います。

フリースクール ForLife の話をすると、今まではフリースクールの良さを伝えようにも、ホームページや SNS、各種講演会等で一方的に発信する以外に方法がありませんから、どうしても客観性を欠いてしまい、フリースクールをご存知でない方々への説得力が足りなかったように思います。しかしながら、今回の試みでは、フリースクール ForLife の他、神戸フリースクール、まっくろくろすけ、研究者の皆さま、そして実際にスクールに通う子どもたちの目が入り、学校外の居場所の信頼性が高まったのではないかと、思います。

子どもたち、スタッフともに、フリースクールやデモクラティックスクールといった多様な学び場への理解が深まったことも、有意義だったように思います。

他の居場所を見学できたのは、感想を聞くに、子どもたちにとって大きな学びとなったようでした。視察後の意見交換の場では、子どもたち同士でそれぞれのスクールの理念について話す場面もあり、お互いのスクールの多様な有り方を認め合うことができたように思います。また、フリースクールとデモクラティックスクールの違いを考察する子どももおり、子どもたちにとって刺激になったと思います。スタッフも他のスクールを見学する機会が実際のところ少ないので、話は逸れるかもしれませんが、この自己評価・相互評価を、次回以降、スタッフ研修の場として位置付けても良いかもしれないと思いました。

また、今回の試みが、他スクールとの交流のきっかけとなったのも嬉しいことでした。フリースクール ForLife に通う子どもの一人が、この自己評価・相互評価後に「スクール同士の交流を続けたい」との思いで、神戸フリースクール、まっくろくろすけとフリースクールはらいふ（大阪府高槻市）を巻き込んだ音楽イベントを企画・実施しましたが、このようなフリースクール間交流は近年無かったように思います。今後ともこの交流が続くよう、期待しています。

一方で、相互のスクールを視察する人数や日数については、まだまだ検討の余地があるように思いました。相互のスクールを視察する際の人数が多すぎると、居場所の雰囲気を崩すこととなり、逆に少なすぎると、客観性を失うこととなります。次回以降は、スクールの規模によって視察人数を変えるなど、工夫する必要があると思います。また、今回視察日は一つの居場所につき一日のみでしたが、やはり一日で居場所を評価するのは困難だったのも事実です。視察人数や日程については、今後とも自己評価・相互評価を続ける中で工夫し、改善できればと思います。

(2) 神戸フリースクール

率直に言って、“評価”というのは難しい作業でした。それは、団体によって価値観ややり方はそれぞれであり、自団体の物差しで他団体の活動等を測ることの難しさを改めて感じたためです。

とはいうものの、大変興味深い試みでもありました。前述のように、デモクラティックスクールやフリースクールの活動は各団体によって様々ですが、根っこにあるものは共通しているものはずであり、あとの枝葉…いわゆる手法のようなもの…が違うだけです。自分たちの考えだけでなく、他団体の取り組みを知るということは、また新しい刺激を得ることもなり、きっとそれは自団体への糧となります。そして、お互いに知っていそうで実は知らないこともいろいろとあったのも、この相互評価という取り組みで得た知見でした。さらには、大人だけでなく、子どももそこに参画するというのも面白いことだったのではないかと思います。お互いに訪問しあって、子ども同士が交流できたことは、他の居場所を知らない子どもたちにとってもいい刺激になったようです。

今後、この相互評価を広げていけるならば、課題としては、ある程度の共通した指標は必要かもしれないということでしょうか。今回の評価指標は、各スクールで設定したものの、ほぼ考え方が似ていたためか、大した違いはなく、お互いに評価しあうことができ、そのときにはわからなかったとしても、既情報として判断できる面がありました。ただ、評価の団体数が増えていくと、お互いに知らな

いもの同士も出てくるはずですが。共通項目と個別項目等に分けるなどして、それぞれ一定の物差しは必要なのかなと。また、何も知らない団体同士での評価を 1 日だけでするのもなかなか難しいことではないかと思われまます。このあたりは、日ごろからの横の繋がりをも大切にしていけることが求められるのではないかと感じました。

要はそういうことなのでしょう。民間で活動していくにあたって、大人も子どもも互いに交流する機会を持てることは、他（相手）を知るだけでなく自分を知るきっかけにもなるのですね。相互評価をすることは、自分たちを知ってもらうことではなく、自分たちを知る機会になります。大変な作業ではありますが、相互評価は他団体を知り、自団体を知る、大切な取り組みになると思います。

(3) まっくろくろすけ

当初の目的の一つに「三校の子どもおよびスタッフの交流の機会とする」というものがあつた。これについては相互評価に参加したメンバーから「これからもっと交流の機会を増やしていきたい」と感想が出ていたり、さらにまっくろくろすけ側からではないが実施後に実際にスクール同士のイベントが企画されたりした。単に一回きりの交流にとどまらず、今回の相互評価をきっかけに今後もスクール同士の交流が続くことが期待される。

メンバーも他のスクールと交流することでお互いのスクールの違いを感じ取り、自分のスクールだけでなくオルタナティブ教育という多様性自体にも興味を持ったのではないかと期待している。例えば、For Life さんに行ったメンバーからの感想に「ミーティングが週に 1 度しかなくて、その雰囲気も話し合いというより雑談に近いような感じだったのが印象的だった。まっくろくろすけは日々のスクール全体の活動と各々が学びたいことの双方で学びを得る場所だけど、ふおーらいふは各々がやりたいこと、学びたいことを活動としてやる場所なんだと感じた」とあつた。このように自スクールとは違ったオルタナティブ教育の存在を実感する良い機会になっていた。

私、個人としても貴重な他のスクールへの見学の良い機会を得て、スクール同士の立場の違いや見ている目線の違いを肌で感じたことは大きな収穫だった。知識としてスクール間の違いを聞いていても、実際に子どもたちの活動やスタッフの関わり方を見るとより明確にそれを理解できた。まっくろくろすけに合わないが公教育の学校以外を探している子ども・保護者に情報提供しやすくなった。

相互に学び合い、協力し合える関係を作るという目的のための初めの一歩となりえたと思う。

二つ目の目的である「相互評価による客観的な視点からスクールを評価する」ということについては、当初考えていた「一日しか見ていないのでわかりませんが」を前置きに忌憚ない意見をお互いに伝え合うということはやはり難しかった。

一日の見学ではなかなかスクールの雰囲気や自スクールとの違いに目が行ってしまい、そのスクールがそのスクールの理念をしっかりと実行しているかを評価するということまで考えが進まなかった。

特にメンバーたちは初対面の他団体メンバーに興味が行き、なかなかスクールのお話をメンバー同士するところまでは一日では少なすぎる印象を受けた。連絡先を交換したメンバー（連絡先を交換すること自体問題になったが）同士はその後のやり取りの中で「スクール間の性質の話で盛り上がった」と話していた。このことからメンバー同士が相互評価を行うことを考えると、もう少し日程を取って行くほうがスクールの特徴を表すような出来事などに出会えて評価しやすいのではないかと思った。

一方で、相互評価の日数を増やすとなると実施のハードルも高くなってしまふ。また、

評価を行うスタッフとしては長く見学に行くと「理念と実際が違うのではないか？」という発言を相手に重く受けとめられることを危惧してしまふ。

相互評価に実際に行く前にもう少し自己評価シートの読み合わせなど下準備がスクール内でできればよかった。（今回はまっくろくろすけ内でも他団体の自己評価シートをメンバーと読み合わせる時間はなかった。可能なら行く前に個別に読むのではなく、相互評価を行うメンバーで他団体の自己評価シートを読み合わせできればよいと思った）

今後この活動を行う上で相互評価をどのように行っていくかについてはまだまだ改良の余地があると感じた。

三つ目の目的に「学校・教育委員会など行政機関との連携・共同を促進するための情報提供になるものを作る」というのがあった。そのため「評価」「成果」という普段は使わない言葉に自団体の取組を落とし込んで書類を制作した。それによりオルタナティブ教育に馴染みのない人にも理解しやすいものになっているのではないだろうか。

お互いに独自の考え、活動を行っている民間施設同士が共通のシートにそれぞれが書くことは難しい面もあった。しかし、同じシートを使うことでこの相互評価の目的や意義を共有し、一定の項目の下で自己評価したことから比較がしやすくなった。他団体と評価し合うことにより、自己満足的な教育で満足するのではなく、客観性を保証したい。そうして得たエビデンスを学校や教育委員会と今以上に連携していくために役立てたい。そのためにも武井先生を始めとする大学の皆さんに第三者として参加していただいたことは大変心強く、さらに気づきを深め、客観性を保証することになった。

このように民間と大学が協同して作成されたこの報告書を内部での学びにとどまらず、外部に公開する取組をどうしていくかが今後の課題である。公開後、それをさらにどう活かしていくのかも重要なことである。この報告書から見てきたものを、兵庫県の学校以外の場で育つ子どもたちへの支援のための政策施策につなげていきたい。

そのためにもこの活動が今回の一回きりで終わらずに継続して続けていけるかにかかっている。この報告書を区切りとしながらも自己評価・相互評価の活動を続けていければと思う。